特殊能力くらいないと探偵なんて出来ません

TheeEnd

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
特殊能力くらいないと探偵なんて出来ません

【Ｎコード】
Ｎ８１９６Ｓ

【作者名】
ＴｈｅｅＥｎｄ

【あらすじ】
雑居ビルに構える探偵事務所。
一見あやしい。一見でなく普通に考えてあやしい。
そもそも探偵ってあやしいよね。
少し覗いてみましょう。迷宮あける鍵ってどんなだろうかね。

プロローグ（前書き）

初投稿です。
憧れの職業、探偵ものです。
読みやすく書くつもりでいます。読みにくい感想でもいいのでいただけたら幸いです。

プロローグ

――　あと二年と決めた。うん、二年弱。

「それでいくら欲しいの？」
「えーどうしようかなぁ」
２０代前半において女子高生とこんなやり取りを行うとは思わなかった。
「別にお金目的じゃないし、好きにしていいよ」
シチュによっては地上２ｃｍ浮き上がるほどのお言葉なのだが…
…うん、説明しようね。

コンっドン！！
どこで習った作法なのだろう、聞いたことのないノックのリズムに
「えっ？はい！！」
つい似たようなリズムで返してしまった。
カチャ。コツコツ。
ドアを開き事務所に入ってきた人間にかける言葉はいくつも持っていない。
「…ご依頼でしょうか？」
「違うわ」
コツコツの正体はローファーである。
そしてそのローファーはセーラー服にコーディネイトされている。
梅の丘高校。通称梅高。そこに通うこれまた通称うめっこ。
この辺りでは二番目くらいの進学校である。…今は知らないけどね。
「では今日は？」
こちらの問いにドアから二歩入った地点より「コツコツ」がさらに近づく。
近づきしなになにやらスクールバッグへと手をゴソゴソ。

「面接をおねがい」
という言葉とともに机に置かれた履歴書。
うん、なんとなくわかった。

僕、探偵だからね。

ホームページだろうか口コミだろうか？この娘はわが探偵事務所を知り、働きに来た。
横柄かつ簡単すぎる態度、言葉に本気さは微塵も感じられなく
「罰ゲームかい？」
モテない男子が言いそうな事を口走った二秒後
「私は本気でアルバイトをしに来ているの。面接をおねがい。面接を」
まぁアルバイトの時点で本気の人は元来少ないものだけどね。いいだろう。乗るさ。暇だし。
女性には強く言えないのが俺だしな。
よく見れば…訂正。よく見なくても振り返るレベルのかわいさを持ったこのボブヘアーの話に付き合うのも悪くない。
夕食までの軽い運動くらいの気持ちで
「じゃ、どうぞ」
と、応接用の茶色い革のソファに。テーブルを挟んで彼女と向き合うことにした。

これが最初の出会い。ノックのリズムとともに忘れはしない。

Z．K．T．J（前書き）

初投稿中です。
憧れの職業、探偵ものです。
読みやすく書くつもりでいます。読みにくい感想でもいいのでいただけたら幸いです。

Z．K．T．J

必ずしも平和が一番ではない職業がこの世の中には存在する。
ある種の人々には非日常、事件こそ飯の種でありつつ、平和を願う義務も課されている。
そんな業種の中にあり、時としてダークサイドでしかない我が生業。せめてもと屋号だけは日向をイメージしてみた。
【Z．K．T．J】
仕事着である黒いベストの右胸のところに銀の糸で刺繍されている。
このベストは自ら決めたこの事務所の、俺の制服だ。
開業にあたり仕立て屋に3着ほど発注したもので腰のアジャスター部にあるシルバーのバックルが非常にいい感じ。コットン地の白いカッターシャツと合わしている。
基本ネクタイはせずに第一ボタンは外す。
シャツの方は常に10着ほどストック。清潔さが一番だ。
下に穿くものは特に定めていない。黒いスラックスやベージュ色のチノパンが多い。そいつに合わして靴も決める。
全身的にタイトに装っている俺の仕事は探偵である。

なぜそんなハードでボイルドなジョブに就いたかは後に語るとして
階段も狭く今にも「老朽化！」と口に出して言いだしそうな怪しい雑居ビルの三階に
これまた怪しく【Z．K．T．J】と書かれた扉の中に我が事務所は存在する。
とにかく扉を開けて欲しい。事務所はいつだってなるべく綺麗にしているし
お客さん用のカップだって紙コップなんかじゃないんだぜ？コーヒーに日本茶、紅茶もあるよ。
ソファだって茶色い革張りので高かった。最初は自分が座る時も誰

かが座る時も緊張したものだ。
そのうち引っ掻き傷も味だって気づいたね。
とにかくだ、事務所に入ってきてもらえばわかる。ここはハードでボイルドな住処ではなく
アットでホームな空間なのだ。
そうだな日本の大学にたとえてみようかな「入るのが大変で…」
…まぁいいだろう…だいたいわかっていただけただろうし。

俺、中村一政（いっせい）（探偵は本名を名乗らなかったりする）は若干ハタチにしてこの事務所を開業し一年弱になる。
事務所などとほざいてみたが零細もいい所だ。今のところは好きにやっているのでしょうがない。
忙しくなってきたら人を雇おうなんて考えてもいるがその際の不安は「俺より探偵なやつが来たらどうしよう」って事。
俺には探偵の英知がない。経験ゼロでスタートを切ったのだ。
それはミステリを読んだり探偵ドラマや映画、二時間くらいのサスペンス物見たりの準備はしたけどね。
まぁそんな不安もしばらく必要ないくらい暇で今日もスケジュールは事務所待機。
この街ってこんなにも平和なんだと実感している。いや、無理にそう飲み込んでいる。
今日こそはと一念発起しこの質素な我が事務所のもうしわけウェブサイトにキラーコンテンツを加えるべく
昼過ぎから机のデスクトップにて管理ツールを開いている。
休憩を挟み約４時間、一念を発起させただけではキラーなコンテンツなどは生まれないと解りはじめてきた頃、例のノックがこの事務所に響いた。
そして一年弱が経過し茶色が少し濃くなってきた革のソファにて面接（笑）がスタートするわけだ。
こいつはちゃんとわかっているのだろうか、扉の文字【Ｚ．Ｋ．Ｔ．

J】

ずばっと、解決、探偵、事務所という事を…

M・N・S・T（前書き）

初投稿中です。
憧れの職業、探偵ものです。
読みやすく書くつもりでいます。読みにくい感想でもいいのでいただけたら幸いです。

M̤N̤S̤T

以前こんな話を聞いたことがある「動物と目が合った場合、先に視線をそらしたらなめられる」と。
たぶん家族向けの動物番組だろう「噛まれた場合逆に手をより突っ込め！」という教えとともに記憶している。

俺はまだ目を合わせないで居た。こいつは黒目が大きい、履歴書を机に置かれた時に確認した。
一度目が合えばきっと壮絶なバトルになるだろう、俺は先にその履歴書とにらみ合うことにした。
これまた意思表示のはっきりうかがえるような凛とした綺麗な字だ。女子高生が用いそうなかわいい感じの書体とは違う。硬筆書写の覚えでもあるのだろうか。
実際その迫力のある文字群に魅せられカモフラされているが、氏名、生年月日、高校入学までの経歴くらいしか書かれていない。まぁ高校生ならそうだろう。バイトの面接に用意する履歴書なんてこんなものだろう。
しかしその空白の目立つ履歴書には、趣味や特技はいいとして志望動機すら書かれていない。いや、正確には書かれている「面接にて」と。
正直ソレは給与等詳細をつめる時などに用いる「こっちのセリフ」だと思うのだが、もしやこの小さな履歴書の欄には書ききれないほどの、3万字くらいの熱い思いをお持ちなのかもしれない。
よし、それじゃあ志望動機はメインディッシュにしよう。

コースのメインは決まった。しかし前菜やスープが決まらない。
面接時の簡単な質問テンプレートでも考えとくべきだったか、いや必要ないだろう。

なぜなら…よし、この質問を最初にしよう。
「えーっと、じゃあまずこの事務所はどこで？」
「ウェブサイト。この街の探偵事務所を検索したの。なかなか引っかからなくて苦労したわ」
なるほど。こっちも初の面接希望者だ。こちらをどこから知ったのか、実際すごく気になる。
「中身もまだまだ製作中でね。味気ないんだ」
「そう？私は逆に落ち着いてて雰囲気があると感じたわ。華やかだったり凝りすぎていたりしたら信用できないもの。あれくらいがいいのよ」
褒められた。上からだけど。
「それはどうも。じゃあ自己紹介してもらっていいかな、もちろん履歴書の字は全部読めたよ」
スープを注文。
「森野サクラ、１６歳。梅の丘の二年。他に聞きたいことは？」
慌ててメインの肉を焼き上げる
「志望動機を教えてくれ。最初は冷やかしかと思ったんだけど。ちなみに今も疑いははれてない」
「探偵って仕事に興味があったのよ。実際はどんな感じなのかなって」
「推理小説でも読んでってところ？」
「そうね。そんなところよ」
俺の勝ちだ。
「じゃあもう一つ。なんで目をそらしたの？」
「え？」
「その大きい瞳と広大な黒目では嘘つくの大変だろう。すぐばれちゃうんじゃない？」
「ふんっ。普段嘘なんてつかないもの。ちょっと説明するの面倒だっただけよ」
「かまわない。３万字までなら聞くよ」

俺は正直興味が沸き始めていた。どうか「下で友達が待ってる」などの興醒めするようなことを言わないでおくれ。
そう、ただふらっとバイトしに来る空間じゃないのだ此処は。単純に狭い階段が怖かったりする。
お前の腰掛けてるソファだって業者さん運ぶの苦労してたんだぜ？
とにかく眼前の麗しき女子高生が似合いそうなバイトはウエイトレスとかそんなんだ。食後の約束のパフェをすぐ持ってきちゃったってギリ許す。
実際ここまでのふざけた口の利き方や態度、俺は流しているだろう？
「サイトでも募集なんてかけた覚えは無いんだけど？」
「ええ。なかったわ一応探したもの」
一応探してくれたらしい。
「そろそろ言葉はまとまったかい？」
「そうね。簡単に言うと私は自分を試したくてここに来たの」
「事件や謎や推理とか？悪いが―」
「わかってるわ。そんなたいした事件なんてそうそう起きないんでしょ？」
「まぁね。浮気現場おさえる位で結構しびれる」
「そんなところからでもいいの。私は私の能力を試したいの」
「じゃあ教えてくれ。ずばり能力とは？」
一度下を向いた視線はまたまっすぐこちらに向き、大きな瞳が二度まばたきをする。
二回目、大きな黒目部分が文字通りすべてお目見えした時、
「念写よ」
「ん？…超能力、か？」
「ええ。そこには無いものが写真に写る。と考えてもらえるといいわ」
フックしていた。エッジが効いていた。アールがきつい。今、不安に思っていることが二つ。

結局下に友達が待っているというオチと壷を売りつけられるオチ。
「まぁ信じないわよね」
「ああ。すまないな。超能力者に会った事も自称超能力者に会った事もなくてね。できれば超能力者の方に会わしてくれないか？」
「今、やれと？」
「入社試験としようか。カメラは？デジカメなら貸すが」
「けっこう。なんでもいいのよ。携帯のカメラでもね。で、何を写すの？」
こいつ引かないな。さっさと壷やお札の紹介しろよ。という俺と本気で興奮している俺。
「ちょっと待って」
俺は立ち上がり流しへ向かい一枚の皿をもって再びソファへと戻った。
流しとここことは簡単な仕切りで区切っている。屏風（びょうぶ）みたいなものだ。
「この皿はもう洗っちまったが三時くらいにおやつを食べるのにに使ったものだ。皿の上のデザートを写しだして俺の三時のおやつを当ててくれるか？」
「そんな必要はないわ。そこのゴミ箱にパヴェルの箱が捨ててあるじゃない。お皿の上にはあそこの名物、モンブランがあったのよ。私、一応探偵志望でここへやって来ているの」
洋菓子店パヴェル。この街の大人気のケーキ屋だ。８割近くのお客さんが名物のモンブランを求めるため、ショートケーキは誕生日などの完全受注生産だ。店頭には並ばない。
「ふーん…あ、お茶もまだだったね。すまない」
俺は再び流しへきびすを返す。
電気ポットの再沸騰ボタンを押し
「お茶とコーヒーどっちがいい？」
と背中から質問する。紅茶は俺の気分ではなかったのだ。
「お茶。」
「はいよ」

と背中から返事をし急須(きゅうす)に手をやる。その時、仕切りごしに

「カシャ」

という音が聞こえた。振り返るとサクラは携帯のカメラレンズを白い皿に向け、しかめツラをして舌打ちしていた。

「っち！」

M̤N̤S̤T→N̤N̤SHA

シューーーッという蒸気とともに電気ポットから「ピッピッ」という電子音が鳴り響く。再沸騰完了の合図だ。
既に急須には茶の葉がセットされ、熱いお湯との出会いを今か今かと待ち望んでいた。俺は特にお茶を淹れる作法を心得ていないので湯飲みを温めたりはしない。茶葉の保存方法からしてあやしい。
来客用の湯のみとマイ湯のみを傍らに用意し、ポットより熱湯を急須に注ぐ。茶葉は「待ってました！」とばかりに緑色の芳香を放つ。
俺はなんとなく気分で二つの湯のみに交互に茶を注いでみる。たしか濃さを均一にするためだっけ？
手の皮膚の厚さに自信が無いのでお盆を使い、ソファにて足を組み携帯電話片手に二つ三つ言いたげな表情でこちらを窺うサクラの元へ。
「お待たせ。粗茶ですが」
と、俺は日本人の慣わしに基づき無意味にへりくだる。サクラは差し出された緑の液体に見向きもせずに
「確かにパヴェルのシュークリームに隠れファンが居るという話は聞いていたわ。８割モンブラン１割シュークリーム１割その他って所ね。どうぞ。驚いた顔をしてちょうだい」
そう告げるとサクラは携帯電話の液晶画面を一瞬で俺の鼻先２ｃｍへ。師範代の掌底だったら弟子は失神している。

結論から言う。こいつには念写の能力があるらしい。
なんとか失神は免れた俺の目が超至近距離の携帯画面の画像とピントが合った時、その視覚情報が脳に向かい脳の主はその書類に「可」のハンコをくれた。書類にはシュークリームと書かれている。
「え？は？」
俺の口からは疑問系の最短語句が二つほどこぼれる。

そう、俺は確かに三時のおやつにとパヴェルのシュークリームをこの皿に用意し、紅茶と共に食んだ。
「これは…」
「おめでとう。超能力者の方に会えたわね、探偵さん」
そういってサクラは俺の差し出したお茶を「あちち」などと言いながら口に運びこちらを薄笑いを浮かべた表情で目だけは睨む。口角の上がり具合に自信の様を感じられる。

俺はこいつの自信満々な表情に信憑性を感じている。
いんちき占い師のベテランであっても、隠し切れない「あやうさ」を感じるだろう。ミリ単位以下でもいんちきの時点でゼロには出来ない。こいつにはソレがまったく感じられなく、あるとしたらスーパー勘違いの線だけだ。ピッチャーが振りかぶって二塁に全力投球してしまうほどの大ポカだ。そんな自信の表情に満ちている。
ただ実際に写真にはくっきりと俺のお気に入り、パヴェルのシュークリームが写っている。どうやらしっかりとキャッチャーに向かって投球しているようだ。
「うーん、すまない。どこから伺えばいいのか質問が決まらない。よければ説明してくれるか？」
「いいわ。まず…」
「あ！」
「何よ？」
俺はサクラにもう一度「すまない」と告げマイデスクへと向かい引き出しから名刺を取り出し
「遅くなって申し訳ない」
と机の上を滑らせ差し出す。
「名前だったら知ってるわ。サイトに書いてあったもの」
サクラはソレを手に取り、なぜか蛍光灯に透かしたりしてみせる。
何も浮かばないぞ？
「まぁね。こちらの自己紹介がずいぶん遅れてしまってすまない。

俺はこの探偵事務所の社長兼探偵、中村だ。この写真をもって君への疑いははれた。ぜひその名刺を受け取って欲しい」
「別に捨てたりなんてしないわよ。ま、常人より理解が早い人だとは思うわ」
サクラは受け取った名刺を机の手許に置き、再び少し温度の下がった緑色の液体を口に運ぶ。
「それはどうも。腰を折って悪かったね。じゃあ続きを聞かせてくれ」
「じゃあ、あらためて…」
名刺と信用の念と熱いお茶が少し溶かしたのか、サクラの表情はこの事務所に入ってきた時よりもだいぶやわらかくなっていた。

「私が念写できるのは私が見たいと思ったものだけ」
真剣な表情で話すサクラのその透き通った目が証明書だった。彼女は丁寧に自分の念写能力についてなるべく細かく説明してくれている。説明の分かりやすさから、きっと事前に話の骨組みを構築していただろう背景が感じられる。

「見たいと思わなければただの写真よ。モンブランと思い込んでいた私がそのまま写真を撮ったってね。あなたは正解とも不正解とも言わなかった。その時初めて見たいと思って。それでシャッターを切ったの」
「なるほど」
相槌が下手な人間でも興味をそそられる話には自然と抜群の間でナイスチョイスの言葉が出るだろう。
「俺は念写ってもっとモヤっとしたものかと思っていた。ずいぶんはっきり写るんだな。後はあれだ、遠くの景色を写すとかね。君は今―」
「サクラでいいわ。探偵さん」
「中村でいい。サクラは今『過去のもの』を写したね。では『未来のもの』とかも写せるのか？」
「残念ながら『過去のもの』だけ。何度か試したわ。一成」
俺はファーストネームで呼んでくれとリクエストした覚えは無いが別に悪くない。幼少時代より大体の知人からは一成（いっせい）と呼ばれる。大概は勢いよくイッセーだ。抑揚の感じが程よく呼ぶ側にも呼ばれる側にも気の利いた名前ではないか。
「で、いつ気づいたんだ？」
「一年ちょっと前ね。高校に入学する前の春休み。離任式で中学に行った時にちょっと一人で黄昏て校内を写して回ってたの。ゆかり

のある教師の移動は一件だけでね。フィルムがだいぶ残っていたから」
サクラは続ける
「二年生の時のクラスが気に入ってたの。楽しい一年だったわ。その時の教室をパシャリとね」
「楽しい仲間が写っていたのか」
俺はサクラの湯のみの緑色の液体の残量を気にしつつ
「その時写っていたのはそれだけ？」
「いいえ。現像を依頼した写真屋は私の記憶庫かってくらい懐かしの思い出風景を何枚もの写真にあぶりだしていたわ」
俺は次のクールでお茶のおかわりを客人用湯のみに注ぐことを決めつつ
「その写真屋を疑ったりは？」
「幸いに先に一貫性に気づいたの」
「見たいもの…か」
「そう。その後なんとなく家の中を携帯でパシャパシャとね」
「勘がいいんだな。探偵に向いてるんじゃないか？」
「ふふっ。だから来たのよ」
いくら食べても胃もたれしそうにないような爽やかな笑顔をサクラは初めて見せた。いい右持ってるじゃねえか。世界狙うか？
「まだまだ聞きたい。もう一杯付き合ってもらうよ」
そう言って俺は熱々のヤツを淹れるべく流しへと向かった。

N・N・SHA→M・N・S・T

「よう、また会ったな」
電気ポットが迎えてくれた。非常に重宝している我が事務所の備品だ。俺は再沸騰ボタンを押し再び背中で問う。
「コーヒーと紅茶どっちがいい？」
「コーヒー。なしなし」
「はいよ。あ、インスタントな」
背中で答える。
「ていうかお茶って選択権は？」
「さあ」
俺は曖昧な答えを発明し、来客用カップとマイカップを用意した。ちなみに俺も無糖派だ。3杯目からは胃を思いやりミルクを入れる。シューーー「ピッピ」再沸騰の合図。カップには既に適量のインスタントコーヒーが用意されている。そこへ向けて熱々を。ふわっと香りたつブラジル。たぶんブラジル。コロンビアとかだったらごめん。
振り向くとサクラはこちらとは逆側の棚に目をやっていたのでこの隙に…

「お待たせ」
俺は香ばしい湯気と共に一枚の皿を差し出した。
「あ！パヴェルのシュークリームじゃない。まだあったのね」
「ああ。冷蔵庫にね。ふわっとラップをかけてしまっておいた。よってお皿も冷え冷えだ」
「確かに、これじゃお茶には会わないわね。いただきまーす」
意外にもサクラはいわゆる「ふた」の部分でカスタードをすくって食べるという上品なまねをして見せた。実際そうやって食べるやつをはじめて見た。

「うまいか？」
またまた意外にもサクラは口元で手を押さえながら
「ええ。とっても。隠れファンがいるのもうなずけるわ。あ、質問あったら適当に続けてちょうだい」
結構上品なやつなのか？結局全然つかめないな。こいつ。
「えーっと、他にこの事を誰かに話した？」
「いいえ。イッセー、おめでとうあなたが初めてよ」
早い。「いっせい」は最短記録の「なか０回」にて「イッセー」へと変貌を遂げていた。
「それは光栄だね。もう一度聞こう。ここに来た理由を」
「同じよ。自分の力を…。ペロっ。っての」
ああ、べつに食べながら喋ってる時点で上品ではないなと感じた。
「そうだったね。ただそのケース、ほとんどの場合に君の前に座ってるのはしがない若者探偵社長ではなくテレビのプロデューサーか何かだ。そしてそのシュークリームは焼肉か寿司だ」
「けっこう堅実なのよ私」
サクラの口角が少し上がる
「探偵に興味があるっていうのも本当よ。それで―」
「採用の話か？」
「ええ。今のところ他の働き口を探す気は無いけど」
俺はカップを置きそのままその黒い液体を覗き込む。

正直採用で決まっていた。
こいつと契約したい理由は念写の他にもう一つある。ソレは後程ってことで
「保護者の同意とか…ないよな。まず履歴書にサクラの名前以外ないからな。どういう形態で働きたいんだ？非常勤ってとこか？」
「うーんまぁ私にだってお茶くみ位できるのよ。と、言ってもこの暇そうな事務所から時給をむしり取ろうなんて非道な事は言わないわ」

「まぁ暇な時は来てもかまわない。んーーで、それでいくらくらい欲しいの？」
「んーどうしようかな…別にお金目的じゃないし、好きにしていいよ。基本的に私はここの仕事をつまみ食いさせて欲しいだけだから」
「まぁ俺だって働きに応じてサラリーはしっかり支払うつもりだ。安心してくれ」
俺がまだはっきり採用と言ってない事にサクラは十分に気づいている。コーヒーをすする俺に
「まだ7合目って所？」
「まぁそんな所だな。聞きたい事あるんだったらどうぞ。」
サクラはコーヒーを一口すすりソーサーにほぼ無音で戻す。シュークリームのラスト一切れを口に含み口元を押さえて
「おいしかったわ。ご馳走様」
「いいえ」
俺は答える体勢になる。
「私がこの部屋に入ってからなぜこんな失敬な喋り方や態度か分かる？正直、こんな怪しい場所、最初怖かったのよ。でも…ほら、さっき言ったとおり勘はいい方なの。決心してノックしたわ」
なるほどあのノックにそんな背景が。決意の二発目ってところか。
「そうしたらけっこう間抜けな返事が聞こえたの。そこからは強気。気づいたらこんな喋り方ではじめていたわ。言っておくけど普段は―」
「でももうあらためる気は…」
「ないわ」
またしてもだ、三食口にしても明日も食べたくなるくらい爽やかな笑顔。抜群の右ストレート。
「聞きたい事を簡単にまとめるとね、私が言うのもなんだけど、あなた、あやしいわよ？」
だろうな。俺だってあやしいと思うよ。
「まずどこから説明しようか…まぁ安心してくれ。俺もこの事務所

もクリーンだ」
「夜な夜な此処が秘密の受け渡し場所になってたりとか」
「ない。この事務所、このビルのこの部屋は俺の持ち物なんだ。家賃はかからない。あと運転資金に困る予定もない。外人のボディガード３０人くらいつけたってしばらくは平気だろう」
「裏にあやしい組織が…」
「後ろ盾、バックボーン、ケツモチの類は当然居る。こういう稼業だからね。ただそちらも安心してほしい。クリーンだ」
「ふーぅん…」
サクラはまだどこか浮かない表情だった
「まぁオールクリアとはいかないだろうがもし俺が信用できなかったらその名刺を持って近くの交番にでも駆け込むといい」
「まぁ一応は信用するわ。犬好きって基本いい人だからね」
そういって後ろの棚に目をやるサクラ。視線の先に
「ああ。あれか。あとまだ話しておく事がある」
香ばしいブラジルの湯気は地球の裏側の空気に溶けていた。

M. N. S. T. last

事務所の備品の一つにスチール製の棚がある。ここを開く時にネット通販にて購入したものだ。当時、少し考えればわかる事だったのだが配達されてきたこいつは組み立て前のもので、取り急ぎ最寄のホームセンターへ駆け込み、工具セットを購入したのだ。
そして組み立てが完了し、その工具セットはそのまま棚一番乗りを決め込み、今現在も一番下の段の右端というポジションを死守している。この棚の特色として約２ｃｍ単位にて段の高さが調節出来るので、一番下の段は高めに設定している。大き目の物や重たいものなんかは下にあったほうがいいからね。その中において工具セット氏は一人背が低く、異彩を放っている。

話は四段目のソレだ。写真立てがある。もちろん中に写真もセットされている。
写し出されているのは食べちまったシュークリームではなく、三人と一匹だ。構成は俺、女子高生、女子小学生、男子小型犬である。
「少し前に犬探しの依頼があったんだ」
「それって探偵の仕事？」
「俺は探偵であって探偵の俺がした仕事だからな。一ヶ月くらい前かな、結構骨だったんだぜ？」
その写真に写る俺は一ヶ月ほど前の俺でニコッと笑ってピースしている。もっとはしゃいだポーズだって似合う年齢なんだけどね。ちょっと髪伸びたかな。耳が何も見えなくなるくらいが俺の散髪時のゴーサインだった。
「まずそのピースしてるのが俺ね」
「わかってるわよ！」
「で、小学生の子が依頼主様、その和風の小型犬が捜索対象だったわけだ。探偵犬ではない」

「この子うちの制服ね。この女の子のお姉さん？」
写真には髪の長い女子高生が控えめな笑みで写っていた。そいつはこいつと同じく梅の丘高等学校のセーラー服を身にまとう通称うめっこだった。
「違うよ。うちの探偵だ。探偵兼秘書だ。今日は一人、任務遂行中だ」
一瞬サクラの髪の毛がふわっとした感じがした。風もないのに。
「全っ全然あやしいじゃない！やっぱりあやしいじゃない！考えられないわ！何よ女子高生探偵って！」
お前が言うな。たしかにあやしいけどお前が言うな。
「どの辺があやしいんだ？とりあえずこいつは妹みたいな―」
「その辺よ！いい？まず妹みたいなもんだって言う時点で大体あやしいの。変態さん。変態探偵さん。変偵さん」
こいつが事務所に入ってきてからどれくらい時間がたっただろうか。俺はこいつと何度目が合い、どれくらい喋っただろうか。ファーストネームは愛称へと発展し、気付けば変態と呼ばれていた。冗談じゃないぞ、俺はまだ２１歳だ。お前らとは４つしか離れていない。小二のとき小六だ！確かに中学も高校もかぶらない年の開きではあるが、そんな年の差はいずれゆるっゆるに緩和されて気にも留めなくなる。１００歳の時１０４歳だからな！
「けっ、何とでも言え。俺はクリーンだ。もとい、俺たちはクリーンだ。こいつは保護者同意の下、ここでバイトしてるんだ」
出るとこ出る気はないけどな。高確率でややこしい話になるだろうし。実際それくらいハイスクールとそこから先って壁は高い。１８歳ってターニングポイントが響いているのだろう。俺はそこから２０歳というさらにどでかいポイントも通過しているからな。
「どうかしらね、とりあえず今日は帰らしてもらうわ」
サクラはそそくさとスクールバックを肩にかけ立ち上がる。半分開いたバックの口に、俺の名刺は投げ込まれた。明日はテレビのプロデューサーと寿司でも行くのかな？逃した魚は大きいのかな？寿司

だけに…
「信じないんだったらそいつに聞けばいい。お前と同じ梅の丘の二年だ。明日も元気に登校してくるだろうよ。『女子高生』探偵だからな」
「ふん！何組よ？気が向いたら聞いといてあげるわ！あなたがどれだけ変態さんかをね」
俺は変態探偵という確固たる地位を確立したのだろうか？いや、こんなベルトすぐにでも返上だ。
「自分で『調査』しろよ。探偵志望なんだろ？『女子高生』探偵志望なんだろ？」
「いいわ！この子の目を覚まさせてあげる！」
サクラはそそくさと扉に手をかけ振り返る。
「その子、名前は！」
「さあな。犬の名前はアレッサンドロだ」
―バンっ！
扉が閉まり面接終了の合図となる。

五月の下旬、だいぶ長くなった陽、窓の外はまだ少しの明るさを残していた。
とりあえずそのプンスカした女子高生念写娘（探偵希望）が家に着くまでもう少し照らしてあげてくれ。綺麗なオレンジでなくてもかまわない。

モノローグ

土曜日の朝。今日もわが街を明るく照らしてくれるだろう太陽に「すがすがしい」という言葉をプレゼントしたい。

俺は朝の８時に起床し身支度を整えコンビニでアンパンと牛乳という朝食界の名コンビを購入し事務所のある雑居ビルの狭い階段を登っていた。通勤途中のコンビニは駅に程近く、普段は通勤、通学前で人が多いのだが赤い日においては大きい荷物を両脇に抱えても誰ともぶつからないくらい空いている。

そしてこのビル、立地においては駅から徒歩５分と好条件なのだが、至るに一度狭い路地をチョイスしなければならない。そして狭い路地を抜けた先には駅前の賑やかさは見当たらない。「にぎ」も「やか」も居ない。そんな所もこのビルを地上からあやしく生やしている所以だ。

この街の駅前は結構栄えてる。内容の充実した駅ビル、各種外食産業が軒を連ね、複合レジャー施設は若者でごった返している。商店街の連中も活き活きしている。

そして広場にはなぜか間抜けなペンギンの像が建っていて待ち合わせ場所に重宝されたりしていたり。そいつはペンちゃんと呼ばれみんなから可愛がられている。いたずらなんてされた事ない。市民の目が彼を守っているんだ。

俺の通勤ルートにこいつは鎮座していて毎朝俺はなんとなくこいつを一瞥。毎朝変わりなくキュートかつ間抜けな面を、駅に背を向け南口の衆に向けるペンちゃん。ひょっとして守られてるのはこっちなのかもな。

俺は気分のいい朝、周りに人がいない時、通りしなに

「おはよう、ペン」

と鉱物のかたまりに話しかける。もちろん返事なんて期待してないぞ？

そう、通勤通学の民が居ない今朝もペンちゃんの前には俺しか居なかった。

そして俺はなんとなく気分がよかったのだ。

しかし、このビニール袋の中のアンパンと牛乳がすべて消化される前には、俺は「そんな気分」ではなくなっているのであった。

ちなみに今日も返事はもらえなかった。

S・D・M

「おはよー！！」
狭い階段の壁に全力で反響し俺の耳へ届く。
振り返るとそこにはにっこりとした表情のサクラが居た。
「おはよう。早いな。殊勝だが俺を抜かしちまったら扉の前で待ちぼうけ喰らうだけだぞ」
俺は再び階段を上りながら背中で言う。そして三階へ到着。…と
「そうね。待ちぼうけね」
事務所の扉の前にしゃがみこんでいたロングヘアが上目遣いでこちらを眺めている。そう、声の主は例の写真の女子高生である。
「わるい、早いな。おはよう」
ごそごそとポケットに手を突っ込み扉の鍵をまさぐる俺。
「いいえ。少し早く着すぎてしまったわ。待ち時間は手許の時計で６分ってところね。おはよう」
前髪を真ん中で分けられたロングヘアは立ち上がり俺が鍵を開けるのを待っている。
「おっはよー、ツバキ。早いわね！」
階段を上ってきたサクラから朝の挨拶。このロングヘアの名前はツバキという。ツバキはこの爽やかな挨拶に対し右手の手のひらを顔の横まで上げ、ニコッとした表情をして返す。微笑み会う両者。この明るい挨拶とにっこりとした表情から察していただきたいのだが、俺への例の疑いははれた。翌日のランチ時にはずばっと解決していたらしい。そしてあの面接もどきが水曜日、あくる日の木曜日、夕刻の事。

―俺は俺の椅子、社長である俺の椅子、つまりは社長椅子に座りデスクトップからニュースサイトを巡回していた。特に気になるニュースもなく、主に昨日行われた欧州でのサッカーのスコアを眺め

ていた。ちなみに俺のお気に入りはイタリアの縦縞だ。
（コンコン）
ノックのリズム、音量で扉の向こうの人物がわかる。
「はい。どうぞ」
でも一応返事はするよね。
「おはよう、ボス」
入ってきたのは我が事務所の秘書兼探偵、新川（あらかわ）ツバキである。今日も手入れの行き届いたロングヘアが美しい。昨日より俺が変態扱いを受けたる所以である。こいつは知っているのだろうか？
「おっはよー！イッセー！」
…知っているらしい。ツバキに続いて入ってきたエスパー小娘、森野サクラ。必殺技は念写だ。どうやら俺への疑いはツバキによってはれたらしい。愛称が復活している。
「いっやー昨日は疑って悪かったわね。あなたへの疑いはすべてはれたわ。ボンボン君！」
俺はそそくさとソファの定位置に座っているツバキを睨む。
「ツバキ、どこまで言った？」
女性には基本強く言わないのが俺。それに別に怒っていない。遅かれ早かれ知れる事だろうし。ツバキはスクールバックより小型のノートパソコンを取り出しながら
「サクラの知りたがっていたこと。私たちの事とボスの懐事情。サクラの中でこの事務所にかかっていたモヤは蒸発したわ」
勘違いしないでいただきたい。別に俺からのリクエストで「ボス」となど呼ばせているわけではない。こいつが勝手に呼び始めたのだ。
「はは。たしかにね。オールクリアよ。んーで、今日は合否を聞きに来たんだけど？」
サクラはツバキの斜め前の位置に座ってにんまり。ツバキの取りだしたるノートパソコンが起動音を響かせる中、俺は社長椅子から立ち上がり茶色い革張りへと向かい、一瞬考えツバキの横に腰掛けた。
「どうせ採用しようが蹴っ飛ばそうが入り浸る腹だろ？好きにしろ」

「へっへーありがとう！イッセー。じゃあ私下っ端らしくお茶入れるね！実はさっきツバキに付き合ってもらって雑貨屋寄ってきたの。マイ湯のみアーンドマイマグ！」
サクラは立ち上がり流しへ。なかなかいい心がけだがキャラ的にどんなお茶が出てくるのか少し不安だ。万が一赤くにごった液体が出てきたら思い切って不採用にしてみよう。
横で無表情で腿に乗せた小型ノートパソコンを覗き込むツバキも少なからず不安な事だろう。そんな無表情なロングヘアにだけ聞こえる声で
「あの事は？」
「いいえ」
「言っても言わなくてもいいし今のところ俺から言う気はない」

シューー「ピッピッ」。どうやら再沸騰機能には気付いたらしいな。教える手間が省けた。そして芳しい緑色の芳香がこの部屋を包む。
「おまたへー」
お盆には三つの湯のみ。なかなかの洞察眼だ、それぞれ俺たちの専用湯のみである。運ぶは放課後のセーラー服。肩にちょこ、ちょこっとタッチするボブヘアーを揺らしながら審判の時へ。
まずは緑色であった事に安堵する。そして差し出された熱々を一口。
「うまっ！」
こいつは某利休の生まれ変わりか？あんな安物のお茶っ葉がどうしたコレ！横を見るとさっきまでノートパソコンを覗き込んでいた無表情は驚愕の顔をしていた。
「へへ。初めてお茶入れたよ。うちでやんないからねぇ。見よう見まねってヤツ」
天才だ。こいつは念写に加えお茶くみというアビリティまで持ち合わせてやがる。偶然でもかまわない、たまにこのクリティカルヒットが出てくれればいい。
「あー、その。採用で」

電撃の採用劇から二日、舞台は再び土曜の朝に戻る

S・D・M―2

ソファに腰掛け、アンパンをほおばる俺はTシャツにロンTの重ね着、ダメージの通ったジーンズにスエードのローテクノロジーなスニーカーという服装だった。ところどころ破けているジーンズが今日のポイント中のポイント。このくたびれ加減については是非に、味。と言ってくれ。出勤時はいつもこんな感じで基本的にこの事務所でいつものスタイルに変身することにしている。

そういえばサクラの私服は始めて見るなぁ。…というか

「探偵を意識なされて？」

「へっへー、そうよ」

俺の対面に腰掛けるボブヘアは、またしても信じられないくらいに爽やかな笑顔。柑橘系の果物の存在を脅かすほどだ。そんなサクラの本日のスタイルはライトブルーのコットンシャツにベージュのキュロットにはサスペンダー、足元は紺のハイソックスに黒いレザーのスニーカー。そして一番のポイントは本人から説明していただこう。

「言わずもがなこの蝶ネクタイが最大のポイントよ！探偵らしさ３０％増しね」

したり顔で襟元の赤いソレをくいっくいっと人差し指と親指でつまんでこちらにアピールする念写ガール。俺は正直に感想を述べる。

「あー、似合ってると思うよ。探偵らしいかはわからないけどな」

正直こいつの小顔をもってすればたいていの服は着こなせてしまうだろう。俺の今着ている服をそのまま着せてしまっても、俺の横でトマトジュースを飲みながらノートパソコンを覗き込むツバキの髪型を乗せても。瞬間にしてきっと前からそうっだった様に感じると思う。

問題なのはそんなサクラが俺のアンパンをじっと睨みつけている事だ。

「ほれ」
俺はアンパンを少しちぎり、物欲しげな蝶ネクタイ娘に差し出す。ソレがちゃんとあんこまで届いている事は言うまでもない。俺はわりと気遣いのできるナイスガイだ。愛も勇気もとっくに友達にしている。
「へっへー、ありがと」
うれしそうに一切れのパンを受け取り口に放り投げるサクラ。こんなにうれしそうに食べてもらったらきっと小麦も小豆も本望だろ。
「お茶淹れるわー。リクは？」
立ち上がるサクラ。そう、こいつが我が事務所でまず最初に掴んだポジション、お茶くみ係。組織にはそれぞれ役割って物が必要だからな。
「黒」
と俺、
「緑」
とツバキ。
「はい。めんどくさいから緑ね。日本人なら朝はしぶーいお茶よ」
っち。じゃあリクエストなんて取るなよ。ちなみに黒というのはコーヒーで緑は日本茶をさす。紅茶は赤だ。言い出したのはお茶くみ係である。それはおとといの夕刻、こいつの電撃採用劇の後、ささやかだがピザなんぞ注文しこの事務所で簡単な歓迎会を催していた時に
「食べ物の味なんてのは色を見れば大体察知できるわ」
というサクラの世の中のシェフたちに喧嘩を売った台詞から派生したものである。
「じゃあ着替えてくるわ」
「はーい」
俺は再沸騰機能の待ち時間を利用していつもの黒ベスト装束に着替える事にした。この部屋には二つ扉がある。入り口と更衣室だ。正確にはたまたま更衣室として使っているだけの部屋、とでも言おう。

扉には
（プライベートルーム）
と英語で書かれている。何を言ってんるんだ、お前なんてずっとプライベートだろ！って文句は受け付けない。
俺は立ち上がりプライベートルーム（笑）の扉へ向かう。っあ、ちなみにトイレでしたら入り口を出て左の突き当たりになります。いつも清潔にしてますからね。

―カチャ
俺は着替えを早急に済ましソファへ戻る。女性を待たせるのはよくない。お茶だって冷めちゃうからね。
「ただいま。ありがとういただきます」
「はいー。粗茶ねー」
あちち。まぁ、粗茶だな。ふつうのお茶だ。おととい繰り出された某利休も驚きの味は鳴りを潜めていた。まぁ会心の一撃なんてたまに炸裂するからありがたいものなのだ。いつも出てたら俺はこいつに莫大なサラリーを支払う事を余儀なくされる。
それに気づいたのは昨日の事、結局こいつはあの面接もどき以来、毎日ここへ入り浸っている。
「ボス」
「うん？」
ノートパソコンを覗き込んでいた真ん中わけロングヘア@今日はワンピースにカーディガン。が口を開いた。もともとそんなに口数が多い方じゃないがサクラの新規加入によってさらに減ったように思える。単純に俺への相槌という役割から開放されたからだろうか？
「コレを」
そういって小型のノートパソコンの液晶を俺に向ける。そこにはメールボックスが広がっていて新着のメッセージが届けられていた。
「依頼か」

S・D・M―3

我が探偵事務所のウェブサイトにもしっかりとメールフォームくらいはあり、大抵はそこから依頼が舞い込んで来る。一応固定電話も用意しているのだが、いたずら防止の意味もかねて依頼主との連絡ツールまでにとどめている。

そしてこの新着メッセージ、どうやら一時間ほど前に届いたもののようだ。現在の時刻は１０時少し前。ちょうど俺がこの街の安全と民の健康を見つめるペンギン様に、朝の挨拶をしていたくらいに届いたものだろうか。

「失礼」

そういってツバキの私物である小型のノートパソコンを受け取り、液晶に目を落とす。小さめのフォントサイズを目で追い回し、やがて脳の一部でその情報を理解した俺は少し目を見開いてしまう。驚愕の合図だ。俺は顔を上げツバキと目が合う。

「来たな」

「ええ。なかなかの大物ね。健やかな朝に緊張感をくれるわ」

だんだんと顔がほころんでくる二人。サクラが来る前までは対面で顔を合わしていたツバキだが、今では右手のポジションに落ち着きがいい。

「なになに？どんな依頼？記念すべき私の初仕事ね！」

俺の対面に座りきらきらと目を輝かせこちらを窺う新入りに、テーブルの上を滑らせノートパソコンを渡す。

正直、こいつが入ってきて仕事が舞い込んでこなかったらどうしようかと心配もしていた。ぼーっとお茶すすってたまにデスクトップ眺めたり本読んだり掃除に夢中になってるだけじゃさすがの若社長も立つ瀬がない。早々に依頼の一件でも来てくれればこいつを受け

ようが断ろうがなんとか面目は保たれる。
しかもだ、どうしたことだろうこの依頼、我が事務所設立以来の大仕事なのである。思えば地味な仕事をこなしてきた。先に紹介させていただいた犬探し、なんとも依頼主は１０歳の少女だった。そして熟年夫婦の浮気調査、かと思えば次は大学生カップルの浮気調査。その他素行調査の類は数件こなした。
もっとも馬鹿馬鹿しかった依頼がラーメン屋の隠し味を盗むという依頼だ。依頼主である競合店のご主人は
「それさえ解れば」
をとにかく主張していた。俺とツバキはまずご主人から現段階のらーめんをご相伴にあずかり、うまい！を連発して見せた。実際は普通の味だった。決してまずくはないのだが、毎日通おうなんて気は起こらないだろう。が、俺たちは「おいしいねぇ」と仲のいい兄妹のような風体でにこやかにラーメンをすすった。
気をよくしたご主人は「変える必要なんてない」と心を改め、依頼を取り下げた。そしてなぜか一万円をくれた。ちなみにこの一連の俺とツバキのやり取りはこのソファにて話し合って決めた作戦だ。
ああ、ばっちりはまった。
そんな日常に毛が生えたくらいの仕事に比べれば一週間胃もたれが続きそうなくらいにヘビーな今回の依頼内容なのである。こいつの記憶に強烈に残り、この先仕事のない暇な時間をまばゆく照らし、照らしまくり、ぼやけて見えないくらいに強烈な閃光を放ってほしい。さすれば「あの時はすごかったねぇ」なんて言って俺の面目も保たれるってもんだ。

「コレって…なかなかすごいんじゃない！？」
きらきらした目のサクラ。さっきまでより輝きを増している。これはもうぎらぎらと言ったっていい。
「こんな平和な街でこんな依頼を受ける日が来るとはな」
ああ、本当に思ってなかったさ。なんせペンギン様の加護の下だか

らな。
「…で、ボス、返事は？」
右側から聞こえてくるは、ここ一年弱もっとも聞いていたであろうツバキの声。現段階でチャンピオンだ。新人登場でそろそろタイトル剥奪か？
「もちろん」
俺は右側の現チャンピオンに笑顔と共にかえす。なぜか人差し指を立てるというポーズも加えてな。今までそんなポーズした事なかったんだけど浮かれてたのかな？
「ＯＫボス」
チャンピオンはテーブルの上の自前のパソコンを腿の定位置に戻し、メールソフトを開き返信の言葉を探す。そう、よく出来た秘書なんだぜ？
「いっやー、どきどきしてきたなー！」
と、蝶ネクタイの挑戦者。俺だってどきどきしている。
なんせ失踪事件なんて初めての大仕事だからな。

S・S・U

俺は無意識の中で何故か立ててしまった右手の人差し指を一瞥し、静かに折りたたんでから腿の位置に戻す。恥ずかしい。頼む、誰も見ていないでくれ！っと願うも、対面からの薄ら笑いに落胆する。目が合ったサクラは三日月目のままに

「うんうん、そうだね。がんばろうね」

と、痩せたままのその目を満月にすることなくうなずいて見せる。

「ちょっと浮かれちまったな。正直恥ずかしいわ。っが、がだ。まだ本決まりしたわけじゃあないからな。いたずらって線もある」

言いながらにして俺は俺自身、襟を正していた。依頼内容が依頼内容だからな、実際にいたずらの線は色濃く残っている。いたずらで素行調査の類の依頼をしてくる奴は少ないだろう。そんなわかりにくい冗談は迷惑でありセンスがない。

「うん。がんばろう！ね」

サクラの顔にへばりつく双子の月は、しばらく肥えるつもりがないらしい。…と、

「とりあえず出来たわ。確認してくれる？」

俺の右側で腿の上の小型ノートパソコンより依頼主（仮）に返信文を作成していたツバキがこちらにノートを差しだす。こういう仕事はツバキに任せる事が多かった。ちなみにこのノートは俺が支給したものだ。もちろん社長として、な。律儀な事にツバキはどこに行くにもこいつを持ち歩いていていてくれる。固より、小型サイズって所もあるだろうが、贈った側としては結構うれしい事だ。うれしい事、なのだが、実際このノートの中身は贈答時からバッキバキにカスタマイズされており、残っているパーツの方が少ないのだという。

ツバキの作成する返信内容は基本的に簡単な内容で、大体の事は

面談して決める。まずはこちらが受けるか否か。ま、今まで依頼を蹴った事なんてほとんどないけどな。次に面談場所、日時。基本はこの事務所だ。ウェブサイトに簡単な地図は用意してあるが、俺が駅前まで迎えに行く事もよくある。基本はこの二つ。ツバキなりに丁寧な言葉を選び返信している。固くなりすぎない程度でな。

「うん。いいだろう」

俺はさっと目をやっただけでゴーサインを出す。読んでも文句つける所なんてないだろうし、あるとしたら誤字脱字の類だ。そしてツバキにとってそんなケアレスミスは皆無だ。

「送信。いたずらじゃないといいわね。あとさっきのポーズはやめた方がいいわ」

「ぷぷっ」

俺はしかめっ面でぬるくなったお茶を口に含んでいた。口の中の苦味と共に、立ててしまった人差し指への苛立ちを感じていた。そして咳払いの後にこう続けた

「浮かれはここまでだ。人差し指のことは忘れてくれ。そんで、だ。依頼の詳しい内容によってはお前ら二人には関わらせないかもしれない」

「はぁ！どういうこと！」

十五夜である。パッチリと見開いた満月のソレは、怒りと驚きとを含み、こちらを睨む。

「おそらく今回、民事ではなく刑事の類の話になるだろう。俺は色んな意味でお前らの安全を保障しきれない」

「だっ―」

「理解しなさいサクラ。遊びではないの」

ツバキは猛烈な剣幕でまくし立てようとするサクラを一喝する。真ん中で分けられた前髪から覗くその双眼は、刺すように厳しくサクラを捕らえていた。

「…わかったわよ。ちぇっ」

わかりやすく口を尖らせるサクラにツバキはこう続ける

「わかればいいわ。いい？ボスが安全を保障できるところまでは付いていきなさい。彼はある程度守ってくれるわ」
と、斜め前の月を諭し終えたツバキがこちらに微笑みかけ
「ね。」
…ん？
「わかったわ！あぶなくなったらすぐ走って逃げるし！イッセーの言う事も聞くよ！」
いつの間にか月は太陽へと変わり、にっこりと俺を照らしていた。
俺はそんな二つの笑顔の中、真夏のアイスクリームのごとく今にも溶けてしまいそうだった。
「ふん。茶がぬるいなあ」
「はいはーい」
流しへ向かうサクラ。ま、正直守ってやれん事はない。俺が駄目でも俺以外の何者かが全力でお前を守ってくれるのさ。それがどんな団体なのかはご想像にお任せする。

シューーー。
電気ポットが再沸騰ののろしをあげる。と
「ピッピッ」「テロン」
再沸騰の合図とメール受信の合図が相殺しあって鳴り響く。

S・S・U－2

熱々のお茶が来るより早く、ツバキはその新着メールを開き、二周ほど読み返す。
「どうぞ」
と言って腿の上から俺の右手へ。黒い小型のノートパソコン、今日はあっちこっちと忙しい。
メールは言わずもがな依頼者からのものだった。メールフォームからではなく、依頼者のみにこちらから伝えるホットラインのアドレスへ送られてきている。ウェブサイトに載せているものとは違うのだ。こうしてうちの事務所はいくつかのアドレスを使い分け、そのうちのいくつかは定期的に変更している。これは事務所立ち上げ時に俺がたまたま見たB級スパイ映画にて主役の諜報員が使ってた手段を真似たのだが、今のところただの骨折りにしかなっていなかった。
「いつでもかまわないと」
メールに目を通し小型ノートをツバキに戻す。
メールの内容はただこちらの要項に答えるものであった。つまり面談についてだ。場所はこの事務所、時間は本日中のなるべく早い時間を指定してきた。
「了解」
再び定位置である腿の上に戻った黒いノートの上をツバキの両手がリズミカルに走る。
「おまたせー。返信来たの？」
お盆から熱々のお茶を差し出すサクラ。だんだんとお茶くみ係が板についてきている。いつかその木製のお盆を銀のトレイにしてやろう。
「サンキュー。あちち」
熱いのはわかってるんだけどね。

「送ったわ。ありがとう」
ツバキもまた熱々に手を伸ばす。
「ああ。とりあえず、今日この事務所に来てもらって話を聞く。そこで―」
作戦会議のスタートだ。三人になってからのフォーメーションは初めてだからな。監督である俺は本日の戦術を手短に伝える。
「わかったわ！」
新加入のストライカーが親指を立ててかえす。俺の人差し指へのオマージュだろうか？
「テロン」
今回もすばやい返信。きっとあちらもパソコンの前で待機してるのだろう。
「すぐ来るって。２５分くらい」
メールに目を通したツバキが告げる。
「え？」
そしてじわじわと慌てはじめる俺。
「お茶請けあったけ？つうか急だな、掃除くらいさせろっての！」
そういって流し横の戸棚へ。日本茶にマッチするものを探る。無かったらサクラにダッシュでお使いさせよう。
「うわー、ちょっと緊張してきたー！」
と言って、サクラは自らのショルダーバックから黒ぶちのメガネを取り出す。おそらく伊達だろう。
「なんだよそれ？」
と、クッキーを手に戻る俺。コーヒーか紅茶にしよう。
「探偵！」
もともと大きめのデザインなのか、サクラの顔が小さいのか？試着はしたのだろうか？まぁ似合ってない事は無い。探偵っぽいかどうかは知らないけどな。
ツバキだけは一人落ち着き、慌てる二人の様子をにこやかに眺めて

いた。

S・S・U－3

そして約３０分後、控えめなノックの音が鳴り響いた。
コン、コン。
「はい。どうぞ」
扉から離れた社長椅子より、少し声を張り上げ返事をする。
「…こんにちは」
と、見た目には２０代後半くらいの女性が恐る恐る事務所へ入ってくる。その容姿は端麗である。
ルックスも然る事ながら、ここにしっかりたどり着いた事を評価したい。大概は近くまで来て迷って電話をかけて来る。と、手にはしっかりとプリントアウトされたここの地図が握られていた。偉い。
「こんにちは。松田様ですね？お待ちしておりました」
俺は立ち上がり、なるべく丁寧に挨拶をする。最初に好印象を与えるのは大事だ。ただ爽やか過ぎても逆にあやしいってことも俺は知っている。
「どうぞ、お掛けください」
革張りのソファへと右手で誘導する。
「失礼します」
女性はサクラの定位置となりつつあるポジションへ、両手をひざの辺りに乗せちょこんと座る。とても小柄な人だ。きっと前世か来世はリスで、ドングリを腹いっぱい食う事に幸せを感じるのだろう。
「はじめまして。社長の中村と申します。よろしくお願いいたします」
俺は腰をかがめ、両手で名刺を女性に差し出す。
「あ、どうも。松田です、よろしくお願いいたします」
女性も中腰になり、その名刺を受け取る。正直こういう時の作法が俺にはよく解っていない。女性を中腰にしてしまった時になんとなく「しまった」と思った。

俺は女性の斜め前に腰を下ろし、女性の対面にはツバキが着いた。
「助手の新川と申します。よろしくお願いいたします」
司会進行役はツバキの仕事だ。ツバキが依頼主に話を聞き、メモを取り、俺は横から依頼主をただただ見ている。大概の依頼主はちらちらとこちらを窺い、たびたび目が合うのだが、俺の視線はぶれない。要項を聞き終えた後、俺はただ
「わかりました。では～」
などとはじめるのだ。こうして俺は俺自身の印象を依頼主に与える。一連の所作から、俺の読みでは敏腕に感じられていると勝手に思っている。そう、敏腕に。まぁもう一つ理由があるとすれば依頼主を見るって事もかなり大事な事だからだ。例えば浮気調査を依頼に来たサラリーマンがしわしわの背広にぼさぼさの頭髪だった場合、わざわざ調査するまでも無く、まぁ浮気されてるだろうと答えが出る。とにかくヒントを集めていくって事がとにかく大事な事で、そいつは依頼者がたんと持ち合わせていることが多い。ツバキからの質問が終わった後、俺は依頼主を観察していて思った事を聞くのだが、ほとんどの場合、前もってツバキが突付いている。間違いなくこいつは既に敏腕なのである。

「それではまず、当探偵事務所はどちらで？」
「ネットからこの街の探偵事務所で検索しました。こんな言い方したら失礼なのですが、なるべく規模の小さい所を、と」
「大事にならないように、っと言ったところでしょうか？」
「はい。あの子はまだ高校生なので…」
依頼者の中ではマジョリティーである。こういう所に依頼してくる人は、話を大きくしたくないって人が多い。そういう所を気にしなければ、この女性（以後松田さんと呼ばせてもらう）はとっくに警察に相談しているだろう。また、我が事務所にとって競合する探偵組織がこの街と隣街とで二つある。まぁ確実に相手にはされてないだろうけどな。あちらは言わば大型チェーン店だ。なんと入会金か

ら取るそうだ。
「どうぞ」
なかなかのタイミングでコーヒーとクッキーを持ってくるサクラ。
いいぞ！メガネも似合ってるぞ！
「ありがとう」「どうもありがとう」「あ、どうもありがとうございます」
それぞれが感謝の意を伝えると、サクラはニコッと松田さんに会釈し、流しへときびすを返す。一応これにてサクラの出番は終了だ。
このあとは後方より我々のカップの中身を注視しつつ、盗み聞きしながら待機だ。もちろん気になった事があったらこいつにも後から聞く。

それでは大変長らくお待たせしました。ここで今回の詳しい依頼内容を説明しよう。ああ、せっかくなので松田さん本人から語っていただこう。
「それではもう一度、今回のご依頼について詳しくお聞かせください」

S・S・U－4

ここをどこで知ったか→依頼の確認というコンビネーションが、ツバキの中でパターン化されている。
「はい。水曜日の夜から高校生の娘が行方不明になってしまいました。私が気づいたのは１９時頃、夕食に呼びに行った時で、最後に彼女を確認したのはその一時間ほど前になります」
「はい」
相槌を打ちながらもツバキは、腿の上のノートに松田さんの話す言葉を、ほとんど同時通訳で原文ままタイプしていた。
「財布などは置きっぱなしでした。それと携帯電話はずっと電源が入っていないようです。それと…」
「それと」
ツバキはほとんど液晶を見ずに松田さんを見ながらタイプしている。ブラインドタッチの極致も近い。もしや適当にタイプしてるのでは？っと、以前液晶を覗き込んだ事があるが、誤字脱字などはどこにも見当たらず、改行や句読点はもちろん、変換すら完璧だ。すべての変換される順番が頭に入ってるとでも言うのか？
「それと部屋にある彼女のパソコンにメッセージが残されてありまして…」
「メッセージ？と言いますと？」
タイプはとっくに追いつき、指は止まっていた。ちなみに、メールフォームに送られてきた内容は、すでに消化していて、１９時頃気付いたという所からすでに新情報なのである。
「メモが開かれていまして、『無事です、探さないでください』と書かれていました。パソコンはまだそのままです」
「他に部屋などで変わった様子は？」
「特に…無かったと思います。たぶん…」
ツバキは松田さんの微妙な間を、スペースキーで表現しながら

「なるほど。では娘さんの事についてお伺いさせていただいてよろしいでしょうか？」
「はい。松田音々（ネネ）、梅の丘高校の二年生です」
「梅の丘の二年生ですか」
表情はそのままに、聞き返すツバキ。どうやら俺は二年生うめっこに縁があるらしい。
「はい」
うつむきながら答える松田さん、俺はそっと後ろを振り向き、サクラに目で問う。
―コクッ
うなずくサクラ。どうやら知っているようだ。
「部活などは？当日は何時ごろ帰ってきましたか？」
「陸上部に所属しているようですが、最近はあまり練習に参加していないようです。あの日は１７時には帰ってきていたと思います」
俺は勝手に短距離走の選手だと予想する。小柄なこの人の子だ、きっと投擲ではないだろう。
「交友関係などは？」
「…少し、わかりかねます。あまりお友達を家に連れてくる子ではいので…」
「お付き合いしている方…交際なさってる男性はいらっしゃいますか？」
ガシャン！っと確実に皿が割れた音が流しから鳴り響く。振り向くソファの上の三人。
「失礼しました！」
ほうきとちりとりを持ち出すサクラ。
「手、切るなよ」
俺は久しぶりに声を出した。
「失礼。続けましょう」
「交際、ですか…ごめんなさい」
あきらかに松田さんは、娘の事をあまり知らない。まぁそういう年

ごろなんだろう。
「わかりました。では次に松田様のことでいくつかお伺いしてもよろしいでしょうか？」
「あ、はい」
いいぞ、ツバキ。どさくさに年齢聞いてくれ、年齢。高２の娘がいてこれだけ若いってどういうことだよ。
「娘さんを抜かした家族構成と、あとお仕事は？」
「旦那は単身赴任中で今は娘と二人暮しなんです。私は専業主婦、です」
若さの秘訣は旦那の単身赴任と見つけたり！
「当日の１８時から１９時、松田様はずっと夕食の支度を？」
「いえ、１８時に材料の買い足しに。その時に娘に告げて出たので…」
「なるほど。もどられたのは？」
「３０分後くらいですね。娘には告げていません…」
ふむ。まぁ確実にその３０分間だな。
「なるほど。では次の質問よろしいでしょうか？」
「はい」
「松田様とネネさんの関係についてです。親子、という事ではありませんよ？わかりますね？」
やや強めの口調のツバキ。俺は一瞬びくつき、数えていたツバキの「なるほど」の回数が吹っ飛ぶ。
「…はい」
曇った表情の松田さん。そんな表情がまた絵になる。
「あまり上手くいっていない、と言ったところでしょうか？」
まぁここまでの問答を聞いていれば誰だって感じる事だろう。
「お恥ずかしながら、最近はあの子の考えている事がわからなくて…。２ヶ月くらい前からでしょうか、会話も減ってしまって」
こんな綺麗な母親と口を利かないなんて！もったいない！
「そうですか。難しい年ごろですものね」

お前もな！
「…はい」
「それでは、本日、この後のご予定は？よろしければご自宅を拝見したいのですが？」
「ええ、かまいません」
そう、現場が一番大事なのだ。本気で虫眼鏡で探索したっていいくらいに大事だ。
「ありがとうございます。それと身分証明書を写させていただきたいのですが？もちろんご要望があれば後からしっかり破棄させていただきます」
「あ、はい」
松田さんは財布から免許書を取り出し、律儀に両手でツバキに差し出す。
「失礼いたします」
ツバキももちろん両手で受け取る。その辺はぬかりない。そして立ち上がり、社長机近くにある複合機へ。しまった、ここはサクラとの連携をとるべきだった。サクラの野郎メガネ拭ってやがる。
「お返しします」
「はい」
このやり取りも無論、両手ｔｏ両手だ。…あ！そういえば免許書、生年月日わかるじゃん！よっしゃ！
俺は一秒でも早く免許書のコピーが見たくてうずうずしていた。

S・S・U－5

「新川君」
慣れない呼び方だ。声帯がビックリしている。
「はい？」
俺は目線と左手で免許証のコピーを要求する。手渡されたコピーを見て
「ああ、住宅街の方ですね」
住所を気にしていた俺を装う。本当は全然気にしてない。そんな事より…
「それでは依頼料のお話をさせていただいてよろしいですか」
「はい」
事務的な話が始まったようだがあまり耳に入ってこない。俺は生年月日から年齢を割り出す計算をしていた。ふむ、まぁ高校二年生の子供を２０代前半で出産していたらちょうどいいくらいの年齢だな。具体的な数字は秘密だ。依頼主のプライバシーってのがあるからな。今や企業が情報漏えいなんて絶対にしちゃいけない時代なんだぞ？それに女性の年齢を気にするなんてよくないよ。
「それでは調査日程についてですが」
「はい」
ん？日程の話になってるじゃねえか、全然聞いてなかったぜ。俺は次に松田さんのファーストネームに着目していた。「松田萌」。萌パパに萌ママには予知能力があるのか？名前通りに育ってくれたのはもちろん、高校生の娘を育てながらも名前通りをしっかり継続中なのである。これはすばらしい事で、例えるならルーキーの倍の年齢のプロスポーツ選手だ。衰え行く肉体を日々の鍛錬で維持し、培われた経験でチームを引っ張る、そんな―
「わかりました。」
やば、全然聞いてなかった！日程の話終わっちゃってるよ…

「本日はお車で？」
「はい、駅の方のコインパーキングに」
へー運転するのか、この人。と、俺は「この人」の運転免許証のコピーを見ながら思っていた。
「社長」
きっとツバキの声帯も驚いてるに違いない。
「うん。出して」
ツバキは立ち上がり、社長机の後ろにある金庫へ。実はこれが狭い階段を運ぶのに一番苦労した（していた）ものだ。高さは俺の胸くらい、奥行きは俺が前ならえしたくらいの大きさで、重さは想像もつかない。一瞬でコレを破壊できるものをイメージできる奴は、危険人物候補生か現役危険人物だろう。ちなみにツバキに質問したところ、聞いた事のない科学液体の名前を出し始めたので、俺は耳をふさぎ、「もういいやめて」としゃがみこんだ覚えがある。
「どうぞ、駐車場代です」
と、封筒を差し出すツバキ。中には駐車代を支払ってもおつりが来るくらいの金が入っている。そーなんすよ、いつもこうしてるんすよ、うち。
「え？そんな…」
遠慮した顔もまた良かった。
「お受けとりください」
遠慮をねじ伏せるべく俺。こんな所で手古摺らさないでくれよ？こういうのって無駄な時間だって思ってるんだ。
「はぁ、それでは、ありがとうございます」
意外と早く決着がついた。

これにて面談終了。松田さんは立ち上がり、まずサクラに向かって
「ごちそうさま」
と、貴重な笑顔で会釈した。入室してからずっと曇った表情だったが、笑顔にぎこちなさは無かった。

「それではよろしくお願いします」
今度は俺とツバキの二人分。しっかりと腰を折り、丁寧にお辞儀してくれた。
「はい。おまかせください。それでは後ほど。近くなりましたら一度ご連絡いたします」
うん、がんばるよ、俺。
「それでは失礼します」
もう一度軽く頭を下げ、扉に向かう松田さん。それより先に到着し、扉を開けるサクラ。そう、これもさっき決めた。
「ありがとう」
またもやサクラに微笑みかける松田さん。ずるい。
「いえ」
微笑み返すサクラ。
―バタン　　コツコツ・・・
狭い階段と靴底の奏でる音が、壁に反響してこちらに届く。

ふーーーっ
「あ」
俺たちは、同時に三人とも伸びをしていた。
「ははっ」
顔を見合わせ微笑みあう。所謂「現場に居なければ解らない笑い」ってやつ。もし友人に「それでね、三人同時に伸びしてたんだよ！」なんて言っても「へーえ…」なんて言って変な顔をされておしまいだろう。

そして時刻はもうお昼時、昼食にするか迷い、先にミーティングを始めることにする。

M・T・G

サクラが熱々のコーヒーを淹れ直し、ＺＫＴＪ緊急ミーティングが厳粛に開催される。
「家出でしょうね。親子関係が上手くいってなかったのよ」
サクラは給仕しながら先制パンチ。こいつもしっかりと聞き耳立てていたので、会話の内容はすべて把握している。終盤部分にいたっては、俺よりも詳しい事は言うまでも無い。
「そうかな？」「そうかしら？」
惜しい、もう少しで完璧なハーモニーだった。ツバキが「どうぞ」と左手を出す。
「まず財布が残っていたと言っていたな？家出するのに財布持ってかないなんてナンセンスだろ。それに…」
「それに？」
「書き残しね？」
あれ？ツバキ？俺に譲ってくれたんじゃないの？
「そう。わざわざパソコンのメモに残すなんてのは不自然じゃないか？紙っきれにでも書けばいい。あと…」
さらに続ける。正直続けながら俺はぞくぞくしていた。なんと言うか気味の悪い話を憶測で喋ると、ソレが本当になっていくような、そんな気がしていた。
「萌さん…松田さんが買い物に出たのは偶然だ。その偶然に乗っかったとも考えにくいし外でバッタリなんてリスクも考えられる。仮に偶然に乗ったとしてだ、急いでパソコンのメモソフト立ち上げるか？そしてそういう急な展開においては逆に財布だけは絶対に持っていくと思う。というか、もう根本的にだ、高校生にもなって着の身着のままの家出なんてしないと思う。も…松田さんが部屋に変わった様子は特に無かったと言っていた。いくらコミュニケーションが取れていないといってもだ、ある程度の何か持ち出した感じはわ

かるだろう」
「ふーん…、と言う事は？」
サクラはもともと大きな目を少し見開き、口元で右手をグーにしていた。
「誘拐かもな」「誘拐かもね」
俺とツバキは見事なハモリに成功し、今度は俺が「どうぞ」と右手を出す。
「単純に、悪いケースから考えていくって言うのは大切よ。思いつく中での悪いケース、とりあえず誘拐ね。」
「誘拐…なんかえらい事になってきたね…大丈夫なの？私たちで？？」
さあな。無理かもしれないな。だけど…だ。
「さっそく反則使おうぜ。やばそうな所で警察なりなんなりに引き渡せばいい」
「ふふ、私の出番ってわけね！…でもさ、警察に手柄持ってかせるなんて何か腑に落ちないわ。あれね、探偵ものでよくあるパターンね」
俺は立ち上がり、社長机に向かって歩き出す。
「結局犯罪者を裁くのは警察だ。が、俺たちの仕事はもうそこではないんだよ。愛とか勇気とかの名の下にだ、萌さんに免罪符でも与えて娘との仲を取り持ったりしちゃうのがトゥルーエンディングだろ」
俺は社長椅子に腰を下ろし、にこやかにサクラを見る。
「いいわねそれ！粋よ！粋だわ！ツバキ、イッセーが粋なこと言ってるわ！」
「ふふ、そうね。でも今回は人差し指立てたりしなかったのね」
いつ忘れるかを考えるより気にしないって事を覚えよう。あの時立ててしまった指はもう折りたためない。
「ふん。サクラ、ちょっとこっち」
「ん？なに？」

立ち上がりこちらに近づくサクラ。俺は机の二番目の引き出しを開け、中から
「お前のだ。期待してる」
最新のものから少し前のものだが人気が高く、生産が終了している今、プレミアがつき始めている黒いデジタルカメラをサクラに差し出す。
「へ？私に？ありがとう！ばっしゃばしゃ撮るわ！」
「使い方はまぁ適当に。どうせ説明書は読まない派だろ？」
ウィーっと電源が入ると同時にレンズが飛び出す。
「よくわかってるじゃない。そんなもの必要ないわ！」
くるっと振り返るサクラ
「ツバキー、ちーっず！！」
―カシャ
ツバキは瞬時に雑誌のカバーを飾るアイドルも真っ青なほどの、キュートな表情とポーズをとってみせた。肩にかけたカーディガンもあいまって、天女のごとき美少女が写し出された。

これ、念写とかじゃないっすから。

M・T・G―2

空気が固体化したように俺とサクラは動きを封じられていた。
「なんちゃって」
と、その抑揚の無い言葉にて、我々にかけられていた時空魔法が解ける。
「ほ、保存よ！保存！永久保存よ！」
そりゃそうだ。もう次はいつあんなサービスしてくれるかわからないからな。
「ははっ、うちのサイトのトップにしちまうか！」
と、俺も乗っかってみる。既にいつも通りノートパソコンをのぞき込んでいるツバキは、その液晶を眺めたまま
「やれるもんならやってみなさい」
つまり「やめろ」の上位句&少し冷たい口調。
「するわけ無いって。いよいよ本格的にあやしくなっちまうわ」
「あやしいとは失礼ね」
と、いたずらに一瞬だけ微笑むツバキ。この時点で既にアイドル並みのルックスなのである。
「あーーーーーーー！」
「ん？どうした？」
「保存しようと思ったら消しちゃったー！！」
ばかーーーーーーーーーーーー！！

もう一度お願い！なんてツバキに言えるわけもない俺たちは、運ばれてくる時間を逆算して、先に出前を注文する事にした。正直アホのサクラには、水でも飲んどけと言いたいところだったのだが、これからの活躍を期待して、特別に午餐を共にする事にした。
そして再びミーティングが始まる。

俺は注文をし終えると受話器を戻し、再びソファへ。
「あーそう言えば二人とも知ってるんだろ？ネネ嬢のこと」
「結構有名だもん。ね？ツバキ」
「ええ。私たち学年の女子生徒の中では１番有名だと思うわ」
「有名？なんでだ？」
二人の現役が語る梅の丘高校での松田音々は、容姿端麗やら才色兼備やらの四字熟語が色々付いてくる、要は優等生なのであった。そして、そんな優等生が学年一の有名人になった所以が、ミスコンなのである。
「あれか、ミスうめっこか」
「そう。よく知ってるじゃない。あの子ったら一年生の６月にはエントリーしてたわ。一年生挑戦者は結構有名になったのよ」
梅の丘の女子憧れの栄冠、ミスうめっこ。通称ミスうめ。毎年、校庭の梅の木が五月雨に濡れる頃、自薦他薦問わず公募され、１０月の下旬に在籍生徒の投票によって決められる。１０月上旬の体育祭は、最終選考とよばれている。強制ではないが、投票率は９０％をきった事がない無いらしい。見事栄冠に輝いた女子生徒は、１１月の文化祭から始まり、一年間に渡り学校行事に従事するのである。なんと卒業式で送辞を読むほどだ。なんで俺がこんなに詳しいかって？
「俺もうめっこだったからな」
「えー、あんた梅の丘だったの？」
「あんたとは何だ、社長と言え」
「社長、あんた梅の丘だったのね。こんな事してるから頭くるっくるかと思ってたけど結構頭いいのね」
確かに。どこで道を誤ったんだろうな。梅の丘はそこそこの進学校だ。
「ほっとけ。あと自分で頭いいみたいに言うな。で、結果は？」
「３位。２０人中ね。結局一年生のエントリー者は彼女だけだったわ」

ミスうめにエントリーするのは、ほとんどが二年生であった。任期の問題から三年生はそもそもエントリー出来ない。一年生で挑む者は、毎年一人居るか居ないかだった。
「大健闘じゃないか。他には？」
「あと去年の生徒会の副会長と噂になってたの。ツバキったら変な質問するんだもん」
俺は割れた皿を思い出した。あれって確かシュークリームのじゃ…
「一応ね。あの時は事実無根だったようね」
こいつでも学校の噂に耳を傾けたりするのかとツバキの側頭部を見る。この板のように整ったロングヘアには、保険をかけたっていい。
「でまかせか？まぁ一年で3位になったりしたらな。あやしまれるだろうな」
「確か三学期の頭から話題になって。んで二年になってすぐよ、ネネはみんなに事実無根って言って回ったの。私その時初めてあの子と話したわ」
「ふーん。あ！」
俺は再び社長机へ。三段目の引き出しから
「忘れる前にっと。サクラ、お前の手帳。ツバキも同じの持ってるんだぜ」
黒い革のカバーの手帳。梅の丘の生徒手帳と同じくらいの大きさかな。
「へー。ありがとう」
「困った時は、手帳。よね？ボス」
こいつはもう気付いているらしい。俺は本当に困った時のために、カバーの内側に一万円を貼り付けていた。俺はうめっこ時代、同じことを千円でしていたのだが、在学時代は完全に忘れていた。あの野口氏はいったいどこに行ってしまったんだろう。
「ああ。気になった事があったら書いておけ。まぁ雰囲気的な意味もある」
「あ、ボス、報酬の事だけど―」

コンコン
「お待たせしましたー」
ツバキの事務的な話をさえぎる出前の到着。お昼のピーク時だが結構早かったな。
「後にしよう。飯のときに金の話はよくない」
「そうね」

入り口で出前の兄ちゃんを満面の笑顔で迎えるサクラ。どうだ？サービスしてくれたっていいんだぜ、兄ちゃん？

M・T・G―3

代金は俺の財布から捻出され、出前の兄ちゃんは二回ほど俺の顔を覗き込み
「まいどー！」
と、狭い階段をリズミカルに下りていく。彼が何を思ったのかは大体察しが付く。あやしげなビル、土曜の昼下がりに若い女を二人も囲って何者だこいつ？ってところだろうな。逆の立場だったら俺だってそう思う。店に戻ったら厨房はもちろん、ちょっとした常連客にさえ話して回るだろう。
「えーっと、チャーシュー麺がイッセーね。タンメンが私、と。んで、テリヤキバーガーがツバキっと」
俺は腹ペコだった。朝食べたアンパンは胃液に濡れ、俺はもう力が入らなくなっていた。そしてラーメンの王様であるチャーシュー麺をチョイスしたってわけだ。ん？どこに出前を頼んだかは秘密だ。
「その小さいとうもろこし見たいの苦手なんだよ」
野菜たっぷり！って所にはいつもそそられていたが、大抵のタンメンには苦手な野菜が何かしら入っていて、俺は生まれて二回くらいしかタンメンを食べた事が無かった。
「ん？ベビーコーンね？かわいくておいしいのに」
と言ってベビーコーンとやらを頬張るサクラ。おそらく口の中では既にかわいくなくなっている事だろう。
「チャーシュー食うか？」
おいしいんだが7枚は少し多い。
「食べる。ベビーコーンいる？」
俺は黙ってサクラのどんぶりにチャーシューを一枚投入した。そして回れ右。ツバキはテリヤキバーガーの上バンズを持ち上げ、チャーシューの迎え入れ体制をとっていた。
「ほい」

「ありがと」
テリヤキチャーシューバーガーの完成だ。
食卓の話題はうめっこ時代の俺。二年生の頃に制服が詰襟からブレザーに切り替わり、俺は両方を所有してその日の気分で着用していた。同級生にそんな生徒は結構居て、俺たち学年の階は少し異様な光景だった。ただ卒業式の日、誰からもそんな発案されていないのに全員がビシッと詰襟で揃っていたのは今でもいい思い出だ。
「ふーん。どっちが似合ってたの？」
「さあな」

昼食が終わり、食後のお茶と共にもはや緊急でもなんでもなくなってしまったミーティングの後半が開始される。
「えーっと、報酬の話ね」
ここで我が事務所の依頼料について説明しよう。基本的にはすべて成功報酬となる。着手金等は一切受け取らず、報酬も最初に定めた金額からぶれない。そりゃ赤字になる事だってあるが、弱小の我が社がよそと張り合うためにはこれ位しないと対抗できないのだ。
「ああ。いつも通り、任すよ」
基本的に料金はツバキが決めている。どういう計算方法で決めているかわからないが、以前たずねた時にただ一言、相場。と言っていた。サイコロの目で決めていない事を願いたい。
「これ、ね」
ノートパソコンの液晶をこちらに向ける。そこには何項目かの費用が書かれていた。請求書のようなものだ。先ほど俺がまったく聞いてなかった萌さんとの事務的な会話の中で、今日中に作成し、自宅調査の際に俺に持たす事が決まっていたらしい。
「ん？」
そこで俺は一点の項目に目が止まる。
「二日間？明日の夜までって事か？」

そこには二日分の調査費しか書かれていなかった。そしてその一日分は少し割り引かれている。なんて良心的。つまり今日の午後からと明日の分ってわけだ。俺にとっては少しも良心的ではない。
「やっぱり聞いてなかったのね。松田さん、月曜日になってネネさんが戻らなかったら、警察に連絡するって。私は止めなかったわ」
まぁ正しい選択だろう。むしろ遅いくらいだ。だが今回、警察の出番は無いかもな。なぜなら
「二日間もあれば十分よ！さっさとネネ捕まえて、どこの美容院いってるか聞くの！」
息巻くサクラ。きっとこの後、反則を連発する事だろう。それが紳士的行為だろうが非紳士的行為だろうが関係ない。
「んじゃ、行くか」

立ち上がる俺。ラーメンのスープは全部飲んじゃ駄目と言われても、全部飲むのが礼儀だと思っている。

H・H

「じゃあツバキ、留守番よろしく」
「気を付けて」
今回の自宅調査は俺とサクラで行う。こちらは現場班だ。ツバキにも重要な任務が控えているが、それは後ほど。
「これ持ってくれ。カメラも入れとくといい」
俺は机の一番下、大き目の引き出しから黒いナイロン素材のウエストバックを取り出し、サクラに差し出した。
「オッケー。何入ってるの？」
両手で受け取ったサクラは、それをたすき掛けにしてベルトの長さを調整する。ベルトの幅は太めで、サクラの控えめな胸をつぶすことなくライトブルーのシャツに絡みつく。
「探偵道具って所だ」
「ふーん」
サクラが後ろを向くと、バックはサクラの背中半分くらいの面積があった。
「じゃね！ツバキ！いい子にしてるんだよ！」
微笑みあう二人。女子ってこんなに早く仲良くなれるもんなのか？と少し疑ってもいた。

―ガチャ
扉を開け短い廊下を行き、狭い階段に出る。先行したのサクラ。なにやらぶつぶつ言っている。
「ほら。やっぱり」
「なんだ？」
「ここの階段、2階から3階が13段なのよ。不吉だわ」
まじか。全然気が付かなかった。怖い話物件シリーズによく登場するシチュじゃねえか。俺は恐る恐る一段ずつ数えながら降りてみる。

「1，2，3、・・・・ん？」
「ん？」
「１１段じゃねえか！どうやって数えたんだよ。２段も足んないぞ！」
「えー！」
指を指して数えなおすサクラ。すると背後から
「こんにちは。賑やかだね」
と、髭のおじさん。一瞬、声も出さずびくっとなるサクラ。
「こんにちは。すいません、騒がしくて」
「こ、こんにちわ」
まだ少し警戒中のサクラ。そしてこのあご髭を撫でて微笑んでいる小柄なメガネのおじさんは、当ビルの２階にて古書店を営む大月さん（６２）だ。最近は古レコードも取り扱うようになったらしい。
「楽しそうでいいね。お仕事かい？気をつけてね」
と言って自らの店舗に戻っていく小さい背中。きっとまだ笑顔のままだろう。

階段を下りて外に出ると、自分はゾンビもしくはアイスかと錯覚してしまうほどの強烈な日差し。思えばもう少しで今日の太陽がもっとも本気を出す時間帯。五月下旬、気が付けばもう夏に程近い陽気だ。
俺はビルに向き直り、すすけたシャッターに手をかける。
―カラカラカラ
と、すんなり持ち上がるシャッター。普段から潤滑油を噴いてるからな。
「ふんっ」
俺は一気に上へ押し上げる。勢いをつけたソレはやがて姿を消し、かわりに目の前には我がガレージが姿を現していた。
そう、１階の所有者も俺なのだ。ついでに言うとだ、このビル自体が俺の持ち物なのである。先ほどの大月さんからも半年契約で家賃

をいただいている。３階が事務所で、４階は現在空き部屋。現在、物置となっている。
「へ？」
ぽかんとしているサクラに、白いジェットヘルメットを差し出す。普段はツバキ用で、顔の部分に透明なシールドが付いている。
「バイクで行くのね？」
「ああ。後ろに乗った事は？」
ツバキ用の物より少し大きめの白いジェットヘルメットを被りながら答える。こちらにはシールドは無く、俺はゴーグルを装着する。
「ないわ！楽しみ！ねぇ、人生変わったりする？」
「さあな」
俺は車体を曳き、ガレージの外に出してエンジンをかける。国産の６５０ｃｃツインエンジンが歯切れのよい低い排気音を立てる。そしてまたビルに向き直り、引っ掛け棒を使ってシャッターを下ろす。長めの引っ掛け棒は階段の脇にある。
「ねぇ、これ…」
振り向くとヘルメットのあご紐に手こずるサクラ。
「かして」
と、言うとあごをこちらに差し出す。目線は左斜め前という頓珍漢な方向。照れてるのかな？
「よし。きつくないか？」
あご紐は完全に締めず、俺の指が二本入るくらいのゆとりを与える。こいつ用のヘルメットも用意しないとな。何色を欲しがるだろう。
「大丈夫！安全運転で！」
任せておけ。ソレこそが俺の真骨頂だ。

ビルを出発したバイクは、やがて大きい道路に乗り、住宅街を目指す。到着まで１０分ほどの走行だろう。俺は背中にダブルミーニングで不慣れな感触を感じ、より慎重にギアをつなぐ。路面にこすり付けるタイヤが、どれくらい磨耗していくか想像するほどの慎重さ

だ。幸い、転がす車輪には上も下も無く、俺たちは川に飛び込むことなく目的地に到着した。
そしてバイクを降りたサクラが一言。人生変わったかな…
「でも探偵ってベスパよね。やっぱ」

T・U・S

辺りは住宅街。主に二階建ての一軒家がひしめき合っている。御多分に漏れず松田邸も立派な二階建てで、駐車スペースには銀色のセダンと、自転車が二台置かれていた。

「うーん…」

バイクを泊めさせてもらうスペースが無い。この辺りは道幅がとても狭いので路肩に止めると通行する車にかなり迷惑だろう。もし自分が運送会社に従事していたのなら、このエリアの担当は勘弁していただきたいと思う。

「ちょっと、回るか」

サクラをもう一度後部シートに乗せ、もう一度ゆっくりと走り出す。見た目とは裏腹に排気音の小さいこのバイク、土曜の昼過ぎとはいえ閑静な住宅街に騒音を撒き散らしたくは無いので助かる。そして５０ｍほど進んだところにオアシスを見つける。

「何だここ？」

家々の森の中に現れたのは、遊具が一つもない小さい公園。公園もどき。広さ的にはその辺の家と同じくらいの面積だろう。ぽっかりとここだけに扉と壁と屋根が無い。ある物はといえば動物をモチーフにした小さい腰掛けのみだった。そしてパンダとワニの腰掛けに、中学生くらいと思われるカップルが座っている。

「……」

きっと俺たちが来る前までは、会話が盛り上がっていたのであろうが、今は黙ってこちらを窺っている。無理やり例えると、カラオケで熱唱していて店員がドリンクを持って来たときのような雰囲気ってとこだ。

俺はエンジンを止め、ヘルメットを外し、髪の毛を右手で整えながらパンダ側に座る少年に話しかけようと目線を送る。が、受け止めてもらえず、結局彼の横顔に向かって話しかける。

「こんにちは。えっと、この自転車って君たちのかな？」
公園の入り口に、寄り添って二台留められている自転車がある。彼らもこれくらい大胆に寄り添えばいいのに、パンダとワニの間には憎きライオンが居る。
「はい。そうです…けど？」
俺の柔らかめの口調が聞いたのか、少年はこちらに向き合い、わざわざ立ち上がって答えてくれた。
「えっと、ちょっとご近所のお宅に用があってね、少しの間ここにバイク止めておいても問題ないかな？」
爽やかに。爽やかに。
「はいっ。大丈夫だと思います！」
おおっ！こいつもかなり爽やかだ！と、いうわけで、ここに駐車させてもらおう。ん？そういえばサクラは？
「うーん、うーーん」
と、うねり声を上げながら例のあご紐と格闘していた。ふらふらと狭い公園の入り口スペースを何周もしている。そうだな、こいつ用のヘルメットは「パチン」って留められるやつにしてやろう。
「ほら、顔かせ」
あごを突き出すサクラ。一瞬恥ずかしそうに目線をそらそうとするが、それよりも早く紐は外れた。なんでこんな単純な仕組みがわからないのだろう…ヘルメットをようやく外し
「ふー、ありがとう」
と言ってバイクのミラーで髪の毛を整えるサクラ。別にどれだけくしゃくしゃになっていても、こいつのボブヘアは様になっていると思う。清潔感と独創性とが、こいつの頭の上では珍しく仲良くしている。
「んじゃ行くぞサクラ。ありがとうね、少年」
そう言って最後にもう一度中学生カップルに目をやると、なにやら羨望の眼差し。たぶん俺たちをベテランカップルと勘違いしているのだろう。違うんだよ君たち。こいつとはまだ出合って４日くらい

だ。
「じゃね！仲良く！」
なんて言って小さく手を振り、「まって！」なんて言ってこちらへと小走りでついてくるサクラ。たぶんまた大きく勘違いされたと思う。まぁ今朝は同じアンパンを仲良く食んだ間柄ではあるがな。きっとあのアンパンもお互いの胃の中で今際の際を迎えている事だろう。炭水化物が消化されるのは８時間くらいと聞いたことがある。もう２，３時間の付き合いだ。

松田邸の玄関の前に到着し、俺はまだ連絡していなかった事を思い出す。そう、
「近くに着いたら連絡します」
みたいな事を言ってたのを完全に失念していた。
「ちょっと…あの子達と喋るか？」
「へ？」
俺たちは先ほどの公園へきびすを返し、到着する間に俺は萌さんに電話をかけた。
「あ、あと１０分くらいで到着いたしますので」
うん。大人のマナーなんだ。もしも萌さんが今シャワーを浴びていたとしたらどうする！

えっと確かアザラシとライオンの腰掛けが空いてたっけ

T・U・S－2

「やあ、元気だった？」
口と目をぽかんとしている少年。約3分ぶりの再会。
「まだ少し時間があってね。アザラシの座り心地を確かめようかと」
入り口から一番近い位置にあるアザラシの腰掛け。少年の右手に俺は腰を下ろす。ほどほどな座り心地。ちょうど足を組めるくらいの高さだった。
「じゃあ私はライオン君ね。でも知ってた？百獣の王はおそらくカバよ！」
あ、それ俺も聞いたことある。サクラは中学生カップルの間に位置するライオンに腰を下ろす。
全員「……」
―しまった！間を空けてしまった！誰か何か喋れ！…ん？お、俺か？
「えーっと、二人は中学生？部活とかしてるの？」
当たり障りの無い会話を投げ込む。まぁこんなところだろう、本来の俺は人見知りとかする人なんだ。この場面、言葉のキャッチボールは2，3球続けばいい。あ、別に野球部ってのを期待してるわけじゃないぞ？俺は生まれてこの方、プロ野球で贔屓にしたチームが無いサッカー派だ。
「今、中学二年です。二人とも部活はしていません…」
まぁそうだよな。土曜の昼過ぎに仲良く公園もどきで逢引きしてるくらいだもんな。しかし中二で彼女とはこいつなかなか…
「…たんですか？」
「え？」
「何か部活なさってたんですか？」
「いや、とくに…」
意外と積極的におしゃべりする子なんだなぁ。そういう積極性が中学二年生にして彼女持ちとなる所以だろうな。きっと。っていうか

また間を空けちまったよ…ん？
「ほらー、絶対切った方がいいよぉ」
と、サクラは中二帰宅部少女の長い髪を上に持ち上げている。
「はぁ…」
少し困った表情の少女。正面から右手で髪を持ち上げられ、初対面の黒ぶちメガネに顔を近づけられている。ていうかサクラってこんなフランクな奴だったのか。俺も少年に対してこれくらい積極的にいった方がよかったのだろうか…いや、気持ち悪すぎる。
「ね、彼氏もそう思うでしょ？こっちの方がかわいいでしょ？」
「は、はぁ…」
「かわいいでしょ？ね？かわいい？」
うわ、こいつ言わせる気だ。これは少年がかわいそうだぞ。スーパー思春期の子を困らせるな！
「おい、その辺にしと―」
「かわいいです！」
言いやがったーー！顔を赤くして下を向いている少年。顔は見えないが耳に朱がいってるので、顔のお色も想像が付く。一方、少女の方も「照」という漢字の成り立ちの途中のような表情をしている。…が、今一番真っ赤な顔をしているのは他でもないサクラだった。なんでだよ！
「あ、あなたなかなか積極的っていうか、男らしいのね。きっと彼女もそういう所に…ね？」
そこは俺も同感だ。今現在、少年の好感度はかなり高い。
「ねぇ？そうでしょ？」
「え？」
「彼のそういう所に惹かれたんでしょ？言ってみなさい？？」
こいつまた言わせる気か！顔真っ赤にして中学生に何してんだこいつは。
「いい加減にしろ、そろそろ行くぞ！」
俺はアザラシを解放し、サクラの腕を掴み立ち上がらせる。

「ちょ、今いいところなんだってば！」
「うるさい、顔真っ赤にして何言ってんだ！二人をあんまり困らせるな」
俺はサクラを強引に引っ張り公園の外へ。
「悪かったな。またいつか！」
俺はあいてる方の手をかざし、少年に別れを告げる。本当にまたいつか会って話したいっていう気持ちも存分にある。
「さよなら」
顔を赤くした二人はほぼ同じ角度で頭をペコッと下げていた。
「仲良くするのよー！…ね、チュ―は？チューはしたのー？ね、チュ…もごもごっ」
俺はセクハラエスパーフランク小娘の口をおさえ、松田邸に歩き出した。

公園を出て２０ｍほどの所で口を塞いでいた手と左腕を掴んでいた手を離し、俺はサクラとかなり密着して歩いていた事に気付く。目が合ったときに少し気まずさを感じたのは俺の方だけかな？
「お前なぁ…」
「いいじゃない。何日かしたらいい思い出よ。彼女もうれしそうだったわ」
ふと思った。こいつには髪型を褒められて、特別にうれしくなるような相手が居るのだろうか？自然な流れだ、聞いてみよう。
「…お前、彼氏とか居るのか？」
「え？ひ、秘密よ。ひ、み、つ！」
いたずらな笑顔で返すサクラ。非常にまぶしい。このまぶしさに照らされたい男なら、二億人くらい居たって不思議ではないな。

そして本日三度目の松田邸前。初のインターフォン。
―ピンポーン

「いないんだろ？」
「ふん！」

T・U・S－3

３０秒ほどインターフォンの四角を目線でなぞる。
「はい」
応答。きっと高性能なマイクなのだろう、クリーンな声が届いた。
「どうも。中村です」
「お待ちしておりました。少々お待ちください」
丁寧で透明感のある声。その声だけで美人と断定できる。昼は何を食べたんだろうか？
―ガチャ
「こんにちは。どうぞ」
本日二度目の萌さん。服装は事務所に来た時と同じ、白いブラウスにベージュのパンツルック。表情だけは事務所に居た時より若干柔らかくなっているように感じる。きっと緊張していたんだろう。
「こんにちは。失礼します」
軽く頭を下げ、まず俺が先行する。次いでサクラ。
「こんにちは」
確認はしていないが、きっと笑顔の挨拶だろう。おそらくこいつは自分の笑顔の価値に、どことなく気付いていると思われる。
玄関で靴を脱ぎ、振り返って靴を外に向けよう…と、サクラが既に自分の分と二人分、済ましていた。
「あ、サンキュ」
「ん？」
感謝の言葉の意が伝わっていないようだ。きっと当たり前の事だったんだろう。なんせまだ出会って４日目くらいだからな、こいつがどんな育ちをしてきたのか見当つかない。
「さっそくですが、ネネさんのお部屋を拝見したいのですが？」
「はい。こちらになります」
と、萌さんは薄い笑顔で俺たちを案内してくれる。かなり疲れてい

るであろう事が、笑顔の切れ目切れ目からうかがえる。万全な状態のこの人はどれだけ美人なのかという発想と、この疲れた感じがプラスに作用してるのでは？という発想。のち、俺は前者に期待する。
「こちらです」
階段を上ってすぐの扉。失踪中女子高生（おそらく美人）の部屋だ。
「サクラ」
俺はサクラがたすき掛けているウエストバックを、指差す。サクラはバックをくるっと背中から前に持ってきてチャックを開け
「はい」
なんとなく気が引けた。先ほどの中学生カップル同様、萌さんも俺たちをそういう目で見てもおかしくない所作だ。４日目にして脅威のなつきっぷり。俺は距離感を誤まらないように気をつけようと思った。
「ほら、お前もつけろ」
取り出したのは白い綿の手袋。俺は勝手に探偵必需品だと考えている。それは俺が参考にしてきた探偵ものの映画にて、着用率が高かったからだ。ようするに新しく指紋をごちゃごちゃ付けるなって事だろ？
「では失礼します。写真を撮らせていただきたいのですがかまいませんか？」
「ええ」
了承は得た。俺はドアノブに手をかけ、背中で反則請負人に告げる
「頼んだぞ。サクラ」
「ええ。任せて」
俺と同じサイズの手袋をはめているサクラ。おそらく指先が余っていることだろう。

入室。俺が今まで女子高生の部屋に入った事があるか無いかはノーコメントでお願いする。
「ふん」

味気の無い部屋だった。まず目に入ってきた勉強机の横には面積の狭いパソコン机が置かれ、デスクトップの画面には例のメモソフトが開かれている。本棚にはかなりの量の参考書。漫画や散文の類はなく、ベストセラーの自己啓発本が何冊かある程度だった。ドレッサーと姿見は、曇り一つなくこちらを映している。収納は壁のクローゼットが請け負っているようだ。一着だけ壁にかけられたセーラー服で、うめっこであるという事を再度確認。あとはベッドくらいか。枕元にはうさぎのぬいぐるみ。ここ何日か寂しく一人で眠っているのだろう、心配だ。うさぎは寂しいと死ぬらしいからな。

―カシャ

早速シャッターを切るサクラ。

「あ」

黒ぶちメガネの奥の表情がいつもより少しこわばり、デジカメの液晶をこちらに向ける。

「いきなりか」

T・U・S－4

液晶に写し出されていたのは、黒髪短髪の広い背中。まず男性とみて間違いないだろう。もしこれが捜索人のネネだったとしたら、この依頼降りたくもなる。実に頼りがいのあるがっちりとした後姿が、例のパソコンに向かっている。

「とりあえず続けてくれ。俺は少し萌さんと話す。部屋の物に触る時は一応言ってくれるか？」

小声で告げると、敏腕エスパーカメラマンは無言で軽くうなずき、再びシャッターを切り始めた。

「少し、よろしいですか？」

俺は振り返り、部屋の入り口付近に立っているマダム萌に向き合う。白いブラウスが実に似合っている。

「はい？」

そのまま廊下に出て、萌さんとは１ｍほどの距離。部屋の中ではコンスタントにシャッターを切る音が聞こえる。ちなみに「カシャ」という音に設定したのは俺だ。

「今回、誘拐の線で調査を進めています」

俺は冷静に、落ち着いた態度で告げる。この場面で俺が慌てていたら依頼主は安心するわけがない。

「え？誘拐ですか？」

驚愕の表情の半分はその小さな右手に覆われていた。隠れていない大きい目がどこまでも大きく見開いている。

「はい。家出の線は薄いと考えています。もちろん無いわけではありません。ただいくつか気になる点がございまして、こちらとしては誘拐の線が濃いとみて調査を進める考えです」

「はぁ…」

右手が下ろされ、すぐれない顔色と虚ろな目が表れる。

「まだはっきりとは申し上げられないのですが、既に手がかりも掴

んでいます。明日の夜には何かしらの大きい動きがある事をお約束します」
さすがに念写して怪しい奴が写りましたなんて言えない。また無事を保障する事もできない。俺はなんとなくにごした言葉で伝えた。
次いで
「当時の事についてもう一度詳しくお聞きしたい点がございます。よろしいですか？」
「は、はい」
力ない答え。かなり動揺していると考えられる。このまま受話器をとって警察に連絡されても文句は言えない。
「大丈夫、ネネさんは必ず見つけます。そのためまずはなるべく正確に当時を振り返りましょう」
俺はまっすぐ強い視線を送る。こんな若造に美人マダムの不安を取り除けるかわからないが、彼女にもできるだけ冷静になってほしい。
「はい。大丈夫です」
五秒ほどした後、萌さんから力強い表情と声が届いた。腹を決めたのだろう。思ったより強い人なのかもしれない。

それから俺は覚えている限りの当時の情報を萌さんから聞き出した。部屋の中では相変わらずシャッターの音が鳴り響いている。いったい何枚くらい撮っているんだろう。
とくに大きく手がかりとなるような情報はなかったが、新しい情報として駅方面のスーパーに自転車で向かったという事、その際しっかり施錠していた事などが挙げられた。これらの小さなパーツを積み上げたりパズルしていくのが大事ってことは、探偵物作品のデフォなので、俺は胸ポケットから取り出したメモ帳に細かく記した。
「ありがとうございます。それでは部屋の調査に戻ります。どうかお気を確かに」
「大丈夫です。お茶、用意しますので15分位したら降りてきてください。可愛い助手さんにお返ししたいので」

さっきまでの暗い表情がニコッと微笑んですらいる。こちとら不安は消し取ったつもりはないが、どうやら強い人だ。
―ガチャ
「どうだ？」
「うーん」
サクラは勉強机の上に置いてある一枚のプリントを眺めていた。
「これ、こないだ出された数学のプリントね。提出は…」
「月曜だな。手は付けてあるのか？」
食い気味に質問を返す
「ええ。しっかりと。もしかして？」
「ああ。赤プリだろ？俺も元教え子だからな」
梅の丘高数学教師赤坂。彼から毎週配布されるありがたいプリント。通称赤プリ。週明け後の授業に絶対提出で、こいつは他の何よりも成績に響く。いくらテストの成績が良かろうが関係なく、提出しなかった者には容赦のないマイナス査定が与えられる。うめっこの学力向上に間違いなくひと役買っている伝統のプリントである。
「今回は問題数がかなり多くて。うちのクラスも水曜日に配られたわ。まさかその日のうちに解いちゃってるとはね」
「正確にはその日の夕方な。正味二時間くらいだな。サクラはもう出来たのか？」
「まだよ」
―カシャ
「おい」

T・U・S－5

ペロっと舌を出しておどけるサクラ。間違いなく消去する気はないだろう。
「ツバキはもう終わってるのかしら？」
撮ったプリントの写真を確認するサクラ。おそらく拡大させて途中式までしっかり読み解くつもりだ。
「終わってるだろうな。あいつすっげえ頭良いから」
「へ？そうだったの？」
「ああ。成績落とさないってのもうちで働く条件だからな、あいつの所。まぁテスト勉強なんてしてるの見た事ないけど」
「へー。じゃあツバキに教えてもらおうかしら」
「そうしろ。丸写しよりましだ」

部屋の調査にもどる。思えば俺はネネの顔をまだ確認していなかった。萌さんの子でうめっこ候補生だからな、期待せずにはいられない。
「よっと」
俺は机の横に掛けてあるスクールバッグを手に取る。チャックに手をつける前に、サクラのいぶかしむ視線を制する
「調査だっての」
チャックを開け、中を探る。目当ての物は簡単に見つかった。生徒手帳である。
「えーっと、うわ！似てるなぁ！」
生徒手帳の写真を確認しネネの御尊顔を拝見。写っているのはおそらく3，4ヶ月ほど前のネネだろう。確か進級する少し前に生徒手帳の写真を取り直していた記憶がある。
「やっぱり似てるわよね。ママ若いなぁ」
少し背伸びして生徒手帳を覗き込むサクラ。そうか、こいつ等はネ

ネの顔を見たことがあるのか。しかし実際に居るんだな、姉妹みたいな親子ってのは。
「まぁいい。じゃあサクラ、クローゼットを軽く見てもらっていいか？俺はお前の冷たい視線に耐えられそうに無い」
「わかったわ」
俺は机の周りを担当する事に。まずはパソコン。メモソフトのほかに開かれているソフトはない。おそらく犯人と思われる例の写真の男が立ち上げたのだろう。そして学習机、こちらも赤プリを今さっきまで解いていたような状態。よく整理整頓された机周りには特に気になる点はない。
「そっちはどうだ」
クローゼットを物色中のサクラ
「まぁまぁお洒落さんね。何着ても似合うと思うけど」
俺は「お前もな」という言葉を飲み込みクローゼットに近づく。
「変わった所がなければそれでいい。あんまりごちゃごちゃさせるなよ。元通りに戻しておけ」
「ほーい」
気になった服を何着か姿見の前でフィッティングするサクラ。
「ところで、何か撮れたのか？」
俺は少し控えめに問う。本当はかなり気なっていたのだが、あんまり当てにしているように思われるのも癪だ。
「うーん。もう撮れまくりよ。こんな調査意味ないわ」
帽子を片っ端から被り始めるサクラ。おそらく自分で似合うと思った物で、何枚か写真を撮っている。俺には全部が似合っているように見えたが。
「早く言え。何が写ってたんだ？あの短髪の男か？」
サクラの肩に手をかけ、こちらに振り向かせる。振り向いたサクラは、ネネのハンチング帽を被りこなしていた。こいつをこのまま５ｃｍ位に縮めたら、なかなかポップなキーホルダーになるだろう。
「さて問題です。あの男は誰でしょう？」

右手の人差し指で大き目の黒ぶちメガネをくいっと持ち上げ上目遣いで出題するサクラ。今のところの登場人物といえば他に思い当たらない。
「副生徒会長か」
俺は疑問系でなく断言する。
「ご名答」
黒ぶちメガネを持ち上げていた人差し指でそのまま俺を指差すサクラ。気になった服のフィッティングはすべて済んだようで、ハンチングだけ何度も試している。よっぽど気に入ったのだろう。働きによっては全然買ってやってもかまわない。あ、ツバキとお揃いなんてのはどうだ？
「とりあえず、休憩しよう。萌さんがお茶を用意してくれている」
名残惜しそうにハンチングをクローゼットに戻すサクラの横顔に告げる。
「わかったわ。ロリママのお手並み拝見ね」
こいつ言うに事欠いてロリママって言いやがった。なんて奴だ。まぁ間違ってはいないがな、本人には言うなよな。
「よし、決めた！」
「うん？何を？」
「ネネ見つけたらあの帽子ちょうだいって言うの。もしくは交換！」
「何と？」
「このメガネ！」
「おい」

S・F

どうやらサクラにとって蝶ネクタイ、メガネ、ハンチングまたはキャスケット帽は探偵のマストアイテムらしい。本来はパイプや虫眼鏡等もエントリーするらしいが、未成年かつ現代的じゃないため除外されたようだ。ただ本人いわくメガネと帽子を合わせると重たい印象になりがちでなかなか難しいらしく、今のところ黒ぶちの伊達メガネのみにとどめている。後にレンズは光が反射しにくい物をチョイスしたというこだわりも判明するのであった。

「探偵を意識したメガネじゃなかったのか？」

味気のないネネの部屋を出て廊下を階段へ向かう。現在二人暮しだというのに2階にはいくつもの扉がある。用途は不明だがおそらくどの部屋も掃除が行き届いているであろう事が、玄関から廊下、廊下から階段、そして廊下からネネ部屋と見て取れる。つまりこの家は一歩入ったときからずっと綺麗なのだ。まず掃除は〇っと。

「琴線に触れちゃったんだもの。一応メガネならべっ甲タイプのがもう一つあるの。わかってる、黒ぶちの方が似合ってる事はわかってるんだけどね。とりあえずネネ見つけたら帽子と美容院聞かなきゃ」

帽子が似合う髪形にするのか、髪形に似合う帽子を被るのかは人それぞれだし俺はそもそもあまり帽子を被らないので、わざわざ美容院にまで行ってキメてもらった髪型を帽子で覆うのは美容師に対する冒涜にすら感じるのだが、このおしゃれエスパーちゃんは現在二兎を追っている。

「帽子は似たようなやつ探せば良いんじゃないか？ていうかさっきから美容院気にしてるな。今の髪型も似合ってると思うぞ？帽子被った感じもちょうど髪型と合ってたみたいだし」

俺は褒めるという事を忘れない。チャンスがあればいつでも狙って

いるのだ。以前、心理テストか何かで、「それは褒められたい事の裏返し」見たいな風に書いてあったが、当たり前だ。褒められたくない人なんてこの世には居ないだろう。

「嫌。あれじゃないと駄目なの。同じのが合ったら良いんだけどね。たしかにネネは顔の作りも良いけどね、毛穴から毛先までしっかり整ってたの。きっと美容師さんもやりがい感じて張り切っちゃたんじゃないかしら。きっとあの感じじゃつま先までしっかり整っていたでしょうね。運動部でありながら恐るべしだわ。それに―」

話し声が聞こえたのだろう、階段の下まで萌さんが迎えに来てリビングに招いてくれた。その顔から相変わらず疲れが所々のぞく。とりあえず今夜はゆっくり休んでもらいたい。俺は何か安心させられる気の利いた言葉を考える。

「紅茶でよかったかしら？」

我が事務所で言うところの赤だ。ただ馴染みの紐の付いた簡単なやつではなく、俺が見たことのないプロセスを踏んで差し出されたソレを、同じ赤といってしまうのは少し気が引ける。そうだ、これは赤ではなく紅だ。

「ありがとうございます。いただきます」

リビングのＬ字型のソファ。色はアイボリーで間違っても紅茶なんかこぼせない。リビングの雰囲気にピッタリはまったソレに腰掛ける。土足文化の無い民族でも、こんなソファのある空間だったら床に座らなくなるだろうな。

「いただきまーす」

三人の真ん中に腰掛けるサクラ。萌さんはＬの短い部分。まぁホストサイドはそこが定位置だろう。それでは紅茶を一口。

「おいしい」「おいしい」

出会って４日目くらいで絶妙なハモリ。萌さんはニコッとした表情をくれたが、シワ一つ見て取れなかった。ハモってしまうのもしょうがないくらいに、奥行きのある渋み。前途の通りティーバッグくらいしか飲んだ事の無い俺にとっては衝撃的だった。紅茶の葉の名

称なんて3っつ位しか知らないが、帰りにそのうちの2つくらいは買って帰ってもいいかなとすら思っている。この分なら料理も○かな。完璧主婦も近いな。と、

「ママすごいわ！」

「ふふ、ありがとう」

などと既にフランクなサクラ。こいつはヘタしたら幽霊にもかんたんに話しかけるかもな。いきなりママって呼ぶのはどうかと思うが、「ロリママ」と呼んでいないだけマシだ。ただこの二人、系統が違うので、仲良くしていても本当の親子や姉妹には見えない。やはりネネと萌さんはかなり似てる。頭のてっぺんから胸の辺りまで、生徒手帳のバストアップ写真から確認できる範囲では、本当良く似ている。…ん？

「もしかして―」

仲良く談話中のところに割って入る。どうやらお茶の入れ方についてサクラがレクチャーを受けていたようだ。

「もしかして、も、奥様とネネさんは同じ美容院に通われているんですか？」

危なく萌さんと呼びそうになる所を踏みとどまり、俺はなぜか奥様などと呼んでいた。

「ええ、そうですけど？」

小首をかしげる奥様。どこで習ったのか教えてもらいたいくらいに可憐な所作。非常に可憐。たしかにその呼び方あってるかもな。

「ちょ、ロリママ！」

「おい」

S・F―2

こいつ言いやがった。美人でかなり若く見える同級生の母親に対してロリママと呼びかけやがった。涼しい午後の風が心地よく通るリビングのソファの上で、俺は背中に一筋冷たいものを感じた。こりゃ依頼をすっ飛ばされたって文句は言えないな。

「えーっと、褒められてるのかしら？」

一瞬戸惑いを見せたその表情は、安心感さえ覚えるようなにこやかなものに。無論、シワ一つない。どう感じたのかはわからないが懐の深い人だ。

「え、ええ。そ、そうですわ…」

サクラが動揺している。あせっている。慌てている。とりあえずこいつのこんな表情ははじめて見たな。「そうですわ」とか言っちゃってるし。悪気は無かったんだ、一緒に謝ってやってもいい。

「じゃあ、ありがとう。ふふ」

年齢の概念を忘れさせるほどのピチピチの笑顔。まだ泳いでる魚を瞬間冷凍させて一気に解凍してすぐさばいてすぐ食べる、それくらいの鮮度が保たれている。なんでも許してくれそうなやさしい笑顔だ。だからってもう言うなよ？

「いやぁ、ほ、本当にお若く見えますっ！ロリお母様！」

「あほ！」

―くすくす

後に萌さんは控えめながらも声を出して笑い始めた。その表情の奥の奥の方には、小さい子供の無邪気さすら感じさせる。ただささすがに転げるほどの爆笑をしたら少しは顔崩れるんだろうなぁなんて思った。

「おもしろいのね、森野さん」

「サクラでいいです。萌さん」

「そう、じゃあサクラちゃん」

ナイス！サクラ！俺も乗っからしてもらうぜ！

気付けばすっかり打ち解けている二人。お茶の話は美容院の話に切り替わっていて、なにやら美容師の名刺を受け取っているサクラ。俺は二杯目の紅茶をすすりながら「洋」の文字が付く色とりどりの小さいお菓子を何個か口に運ぶ。色味と反して甘すぎないソレから匠を感じる。

「…で、バサバサっと」

話は現在サクラのボブヘア。どうやら通っている美容院では大抵思い通りにならず、ほぼ毎回自分で少しずつスタイリングしているらしい。まぁ自分カットにしては良くできてる。匠を感じるまではないがな。なぜなら―

「でもサクラちゃんならどんな髪型でも似合うわ。きっと美容師さんも切っていて納得してるはずよ、イメージが共有できてないだけで」

俺の言いたい事にのし紙が付けられていた。萌さんは右手でサクラのボブヘアをふわとふわと持ち上げている。この二人、今なら親子や姉妹と言われても納得できるかもしれない。先ほどまではただ似ていないだけで否定していたが、要は空気間が大切なのだ。先ほどまでとは違い今ではもう薄い壁。ただ無理によじ登ろうとはしない方がいい厚み、崩壊しては意味がない。人間関係とは常にある程度の囲いが必要なんだろうな。

「萌さんはどんな風に注文してるの？美容師さんに口説かれちゃったりして」

これはつまり「さん付けしてるだけでタメ口」のパターンだ。たぶんこいつの得意技はタメ口。この二人の壁は金網くらいになったんだろうか？でもどうしても女性同士ってのは解らないからな。本当に解らない、何故…。俺は薄い壁が厚く、高くなってしまうことを承知で聞いた。

「何故ネネさんと上手くいっていないのでしょうか？今の僕に萌さ

んはやさしく楽しい良いお母さんに見えています」
ぽかっと口を丸の形に開けてこちらを見るサクラ。確かにこいつはフランクという皮を一枚着ている人間だが、超短時間にあれだけ打ち解け、仲良くお互いの髪の毛を触りあう同級生の母親が自分の娘とは上手くいっていないなんて信じ難い。
「ありがとう、イッセー君。私、恥ずかしいんだけどあの子のこと急に解らなくなっちゃって」
ふふ、俺は既に愛称で呼ばれているんだ。紅茶の二杯目をいただく時のやりとりでちょっとな。
「よその家庭でも少ない話ではないと思います。ちなみにいつくらいからでしょうか？何か大きい出来事とか？確か、ここ二ヶ月くらいは会話がほとんどなかったと…。いえ、調査とは関係ないのですが、俺は聞かずにはいられない。紅茶のおかわりなら何杯でもいただきます、二人の事、教えていただけないでしょうか？」
俺を見つめていた萌さんのやさしい双眼が、少し研ぎ澄まされる。きっと何か余計なものが張り付いていたのだろう、目のやさしさが純度を増す。
「そうね、とりあえずもう一杯いかが？」
「いただきます」
三杯目をいただくべく、俺は両手でカップを差し出す。ニコッとした表情で受け取り、キッチンへ向かう萌さん。俺は知っている、おかわりは新しいカップでやって来ている。
匠だ。

S・F―3

紅茶のおかわりを待つ間、小さな洋菓子に名前があることを知る。なぜかサクラが知っていた。サクラ自身もどこで仕入れた情報かは覚えていないらしいが、おおよそテレビか雑誌だと思われる。ただその名前も、俺は明日には忘れていると思う。でもこの控えめな甘さは忘れない事だろう。またいつか無性に食べたくなったらこいつに聞けばいい。

紅茶の渋みが少し増すくらいの、ビターな親子関係を聞く土曜。そんな週末を「何事も経験」とか「勉強になる」とかそんな思いで消化するほど俺の血は冷たくない。出来るだけ、親身になって考えたいと思っているのは本当で、俺は親子っていうテーマには幾分敏感なのだ。それは横に居るサクラも同じで、萌さんとの間にはこんなやり取りもあった

「サクラちゃんはママと仲良くしてね。私もがんばるわ」

「うん。ママもう居ないんだ。おばあちゃんとは仲良しだから！ふふっ」

萌さんが顔をしかめ、謝ろうとした刹那、萌さんの腹部の辺りにに抱きつくサクラ。勢いが付けばそれは立派なタックルだぞ。あと羨ましいぞ。

サクラには両親が居ない。昨日、俺はどうしても保護者に連絡が取りたいとサクラを説得した時に判明した事で、祖母のハルさんと二人で暮らしているそうだ。その後、俺はハルさんと電話で短い会話をし、サクラに簡単な仕事の手伝いをしてもらう旨、了承を得た。萌さんの腹の辺りで猫のようにごろごろし終えたサクラは、持ち前の鉄板トーク、「おばあちゃんの茶色い弁当」を披露していた。簡単に説明すると色味の無い弁当の話。とにかく遊びが無いらしい。でもサクラはそんな弁当を毎日残さず食べ、しっかり弁当箱を綺麗

に洗って祖母に返しているという。そう言えば昨日も事務所の流しで洗っていた。そんなこいつを愛せない奴はきっとひねくれていると思う。
俺は窓の外の庭を軽く眺め、ふと思い出して携帯からツバキにメールを送った。弁当トークは玉子焼きｉｎネギのくだりへ突入していた。

「サクラ、そろそろ」
「あ、はーい。じゃあ萌ママ、この続きはまたね」
「うん。ネネのことよろしくね。イッセーさん、よろしくおねがいします」
「大丈夫です。このソファにはネネさんと事務所に居るツバキが座ってもまだゆとりがある。僕もようやく紅茶の味がわかってきたところです。その時にまたサクラの話の続きを」
萌さんの顔から、いくつもの腫れ物が取れていた。彼女は今日出会った俺たちに包み隠さず自分と娘の関係性を語ってくれた。内容においてはよく耳にするような思春期における親子関係のように感じられ、父親の単身赴任などが加速装置となり二人の距離を引き離した背景が見えた。ただそんな事は俺にはどうでもよく、肝心なことは非常に簡単な事。萌さんは確かに娘、音々（ネネ）を愛している。それだけ解ればいい。大事にしすぎて結局全然使わなかったり、楽しみにしすぎて冷めてしまった好物だったり、その類い。デリケートになりすぎて愛情の注ぎ方が解らなくなったという、子供が思春期なら親も初の対思春期。きっとプラスとマイナスを掛けるようなもの。マイナスとマイナスを掛けてプラスになるなんてのはただの理屈で数字だけの事。萌さんはただ圧倒的プラスで居たがっている。それが確認したかった。
あとはネネだ。会って確かめないとな。プラスかマイナスか。
あー、誘拐犯なんてのはただぶっ飛ばせばいい。とにかく、この後の捜索も反則を駆使して超ショートカットで執り行う。

俺は立ち上がり、もう一度ネネの部屋へ。小さな洋菓子の名前はもう忘れていた。

T・U・S－6

ネネの部屋に戻り、俺はデジカメの画像を確認する。何枚かの写真に写りこむ黒髪短髪。もう少し詳しいスペックを述べると、色白で良く言えばキリっとした三白眼。悪人ヅラとも言う。机と頭の位置から察するに、俺とほぼ変わらない身長。服装は黒いシャツに濃いジーンズ。

「こいつが噂の副会長ちゃんか」

「うん。女子からは人気無かったわ」

だろうな。悪い顔してるもの。何枚もの写真を確認したが、こいつはパソコンにメッセージを残しただけで部屋を去っている。あとは部屋を眺めているようなカットも数枚ある。―違和感

「ネネが写ってないな」

複数犯の可能性も考えた方がいいかも知れない。

「とりあえず急ごう、事務所に戻るぞ」

時刻はもうすぐ１６時。今朝食べたアンパンは完全に俺の一部になっている事だろう。愛とか勇気とかにな。

階段を降り、萌さんに挨拶。

「何かありましたら逐一報告いたします。ご心配せずにとは難しいでしょうが、どうか今日は一秒でも長くお休みください。また何かありましたらご連絡ください」

「ありがとう。おねがいします」

だいぶ晴れやかにはなったが、まだまだ不安が張り付いている萌さんの顔。明日の夜にはオールクリアにしてやる。

「ママ」

と言ってまたもや抱きつくサクラ。小柄な萌さんは少しでも大きく己の存在を保とうとしている。そしてまたやさしい表情になる。

玄関を何度も振り返り気付けば例の公園もどきへ。あの中学生カップルはもう居ない。きっとまたいつか会えるだろう。俺はバイクに南京錠で掛けておいたヘルメットを取り、一つをサクラへ。あご紐を自分で処理できたかは想像におまかせする。

―あ

「サクラ、ちょっとこの公園、何枚か撮ってくれ」

「ん？中学生？高校生の次は中学生探偵？」

デジカメに電源を入れるサクラ。レンズが羽音のような音を立て飛び出す。

「違う。事件当日だ。時間は１８時前後」

―カシャ　カシャ

「ん？」

液晶を覗き込むサクラ。

「撮れたか？車」

「ええ」

ビンゴ。この辺りで車を停めるならここしかない。デジカメの液晶には白くて少し背の高い軽自動車が写っていた。同級生の若いママも乗ってるやつだ。いかにも若者向けの一台。こいつが犯行に使われた車と見て間違いないだろう。

「よし、急ごう」

エンジンを掛け即走り出す。もうだいぶ暖かくなってきたので、エンジンを暖気する必要は無い。もちろん、俺は安全運転で急いだ。後ろに乗せたサクラも、行きよりも慣れたようで俺の腰の辺りを軽く掴んでいる。なんとも運転のしやすさが背中の柔らかい感触を相殺していた。

我がビルに着き、とりあえずバイクはシャッターの前に停める。狭い階段を急ぎ、事務所のドアの前、とりあえずのノック。

「はい」

聞きなれた声。

「ただいま。どうだ？」
「ええ。済んでいるわ」
手渡された3枚の紙。左上がクリップで留められている。
「ただいまー」
ヘルメットを被ったままのサクラ。あご紐がライバルらしい。
「なにそれ？」
あごをツバキに差し出し、はずしてもらっているサクラ。俺は読み終えた一枚目をサクラに渡す。
「ん？これって…副会長の？」
そう、その3枚の紙には、例の副会長の情報が書かれている。電話番号や現住所はもちろん、免許証のコピーまで。
「しかし毎度凄いな。大丈夫か？本当に」
「大丈夫。神ですら見落としてるわ」
これを訳すと「大丈夫。証拠は一切残していない。文句があるなら言ってみろ？」だ。
そう、これがツバキの真骨頂。こいつのスキルを一言で表すのは難しいが、要は情報収集能力が半端じゃない。もちろん反則は使いまくりだろうな。こいつと初めて会った時、こいつは今のより少し大きいノートパソコンを持っていて、俺の目の前で我が事務所のサイトをぐちゃぐちゃにクラッキングして見せた。1分位でだ。「すごいな」と言う俺に「これはただの技術」と無表情で返したあの頃を思うと、こいつの表情は非常に増えたと思う。要はこいつ、パソコンにものすごく明るいのだ。

「なるほど。とりあえず向かうか」
俺は3枚すべてに目を通し、3枚目をサクラに手渡した。時刻は16時半。片道1時間ほどの容疑者の現住所。俺は立ち上がり更衣室に向かう。
「凄いわねツバキ！」
「あなたほどじゃないわ」

デジカメの画像を眺めているツバキ。勘がいいこいつは、そこに居なかった者に気付いている。
「よし、行くか」
更衣室から戻る俺。手には蛍光灯の光を元気良く反射させる物。
「へ？何それ？」
「金属バット。野球しに行くわけじゃないぜ？」
サッカー派の俺がここ一番に持ち出す得物。正直どんなに強く蹴ってもサッカーボールじゃ相手は倒せないのだ。
「よし、んじゃこの後の予定を発表する」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8196s/

特殊能力くらいないと探偵なんて出来ません

2011年10月9日00時38分発行